京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-3

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二一-三

平安宮中和院跡・聚楽遺跡

平安宮中和院跡・聚楽遺跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安宮中和院跡・聚楽遺跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、マンション建設に伴う平安宮跡・聚楽遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

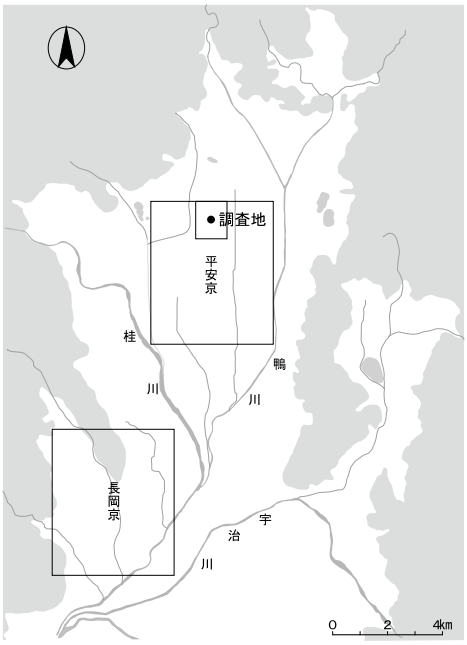
令和３年10月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安宮跡・聚楽遺跡　（京都市番号　20Ｋ481）
2	調査所在地	京都市上京区小山町地先
3	委　託　者	株式会社アクセスコーポレーション　代表取締役　伊東義通
4	調 査 期 間	2021年８月２日～2021年８月30日
5	調 査 面 積	100㎡
6	調査担当者	南　孝雄・中谷俊哉
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「聚楽廻」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとしたが、土製品は「土」、瓦類は「瓦」、金属製品は「金」、銭貨は「銭」をそれぞれ頭に付した。
13	本 書 作 成	中谷俊哉
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協　力　者	貝類・骨類の同定及び分類については、東海大学准教授の丸山真史氏より御教示を得た。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）歴史的環境と立地 …… 3
（２）既往の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 8
（１）基本層序 …… 8
（２）検出遺構 …… 8
４．遺　　物 …… 11
（１）土器類 …… 11
（２）瓦類 …… 14
（３）土製品 …… 17
（４）金属製品 …… 17
（５）その他の遺物 …… 18
５．ま と め …… 20

図　版　目　次

図版１　遺構　調査区平面図（１：60）
図版２　遺構　調査区南壁断面図（１：60）
図版３　遺構　調査区西壁断面図（１：60）
図版４　遺構　地下室19・20実測図（１：40）
図版５　遺構　１　調査区全景（西から）
２　礎石７・24（西から）
３　水溜23半裁断面（西から）
図版６　遺構　１　地下室19（南から）
２　地下室19北断割断面（南西から）
３　地下室20　５層上面銭貨出土状況（北西から）
４　埋甕18（南から）
５　炉状遺構28・29（南西から）

図版７　遺物　整地層、地下室20出土土器
図版８　遺物　水溜23・32、埋甕18出土土器
図版９　遺物　瓦・土製品
図版10　遺物　金属製品・その他の遺物

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：800）　……　2
図３　調査前全景（東から）　……　2
図４　作業状況（南西から）　……　2
図５　周辺調査位置図（１：2,500）　……　5
図６　礎石７・24実測図（１：40）　……　8
図７　水溜23実測図（１：40）　……　9
図８　炉状遺構28・29実測図（１：20）　……　9
図９　埋甕18実測図（１：20）　……　10
図10　緑釉陶器香炉実測図（１：４）　……　11
図11　整地層・地下室20・水溜23出土土器実測図（１：４）　……　12
図12　水溜32、炉状遺構28・29、埋甕18、土坑34出土土器実測図（１：４）　……　14
図13　瓦類拓影及び実測図（１：４）　……　15
図14　緑釉熨斗瓦・丸瓦片　……　16
図15　塼実測図（１：６）　……　17
図16　鋳造関係製品実測図（１：４）　……　17
図17　金属製品実測図（１：２）　……　18
図18　銭貨拓影（１：２）　……　18
図19　「元禄十四年實測大絵図」（後補書題）部分　……　20
図20　「新板増補京絵図　新地入」部分　……　20

表　目　次

表１　周辺調査一覧表 …… 4
表２　遺構概要表 …… 8
表３　遺物概要表 …… 11

付　表　目　次

付表１　土器観察表 …… 21
付表２　瓦観察表 …… 23
付表３　土製品観察表 …… 24
付表４　金属製品観察表 …… 24
付表５　銭貨観察表 …… 24

平安宮中和院跡・聚楽遺跡

1．調査経過

本調査は、京都市上京区小山町のマンション建設計画に伴う発掘調査である。調査地は平安宮中和院跡および聚楽遺跡に該当する。

今回の調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）による試掘調査が実施され、整地層や平安時代の遺物が確認された。このため文化財保護課から発掘調査の指導がなされ、原因者から発掘調査の委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施することとなった。

調査は、文化財保護課の指導により100㎡が対象となり、2021年８月２日から開始した。調査の結果、18世紀半ば頃に大規模な土取りが行われ、そのあとに整地をして町屋を建てたことが明らかとなった。整地層からは江戸時代の遺物とともに平安時代の土器類および多量の瓦類が出土していることから、平安宮中和院に関連する遺構はこの時期に失われたと考えられる。図面作成・写真撮影などによる記録作業を行い、同年８月30日に調査を終了した。

調査中は適宜、文化財保護課による臨検・指導および、検証委員の近畿大学の網　伸也教授、京都大学の伊藤淳史助教の視察を受けた。

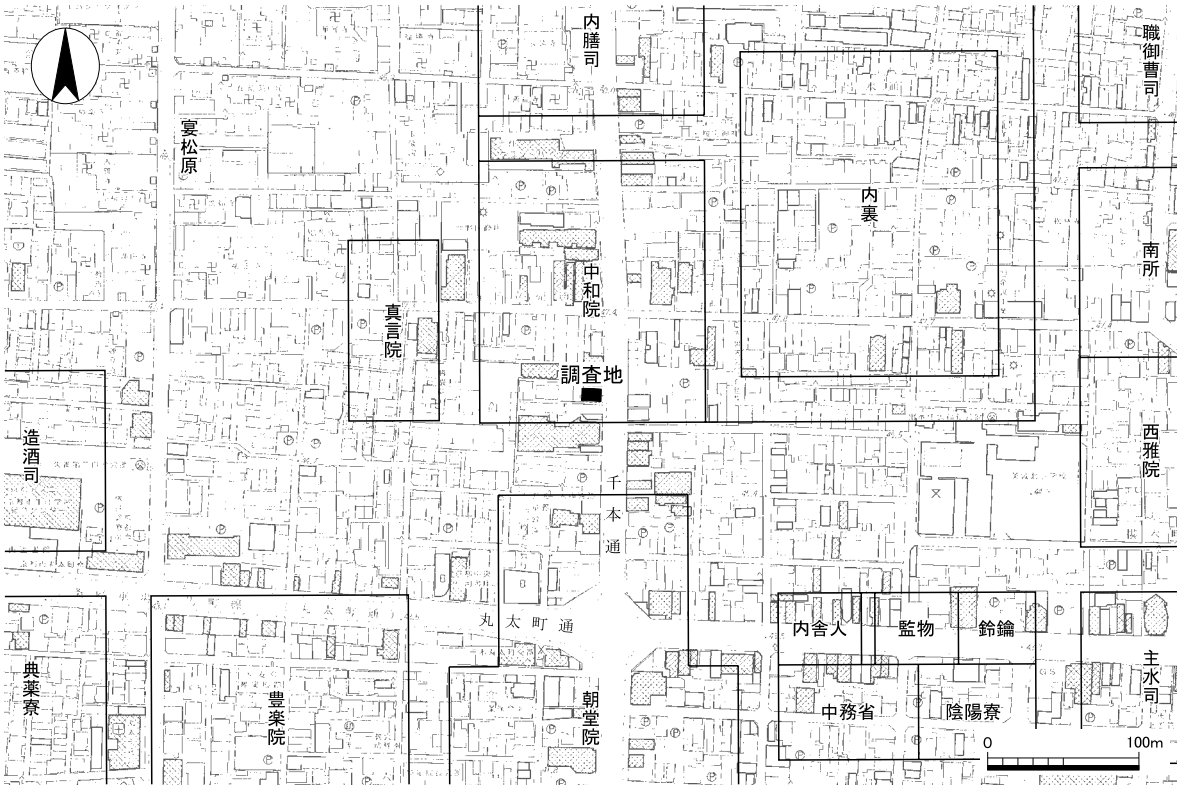


図１　調査位置図（１：5,000）

図２　調査区配置図（１：800）

図３　調査前全景（東から）

図４　作業状況（南西から）

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地

調査地は、京都盆地北部の北から南にかけて緩やかに傾斜する台地上、標高46ｍ前後に位置する。この台地は、更新世の段階に堆積した大阪層群が、紙屋川などの小河川の開析によって段丘化してできたものである。台地は鴨川や桂川といった大河川から離れた位置にあり、周辺を流れる小河川は水量が少ないため、河川氾濫の影響を受けにくい立地となっている[1)]。

調査地周辺では、縄文時代から古墳時代にかけての集落跡である聚楽遺跡、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落跡である瑞鳳遺跡が展開する。平安時代には平安京が造営され、調査地には平安宮中和院が置かれた。中和院は平安宮の中央に位置し、南側に朝堂院、南西側に豊楽院があり、東側の内裏とは内裏外郭で囲まれ、一体空間となっている。中和院は、新嘗祭や神今食といった国家的祭祀を天皇が自ら行うための施設であり、創設は史料から延暦年間とされている[2)]。建物配置は、正殿の神嘉殿を中央に、東舎・西舎をその東西脇に置き、神嘉殿と東舎・西舎を渡廊で繋ぐ。正殿北方には北殿を置いたと推定されている[3)]。この中和院は、発掘調査から10世紀後半に、史料からは1058年・1082年・1112年・1163年・1177年に火災にあったことが知られており、1177年以降は再建がなされないまま空閑地になったと考えられている[4)]。鎌倉時代以降は原野化していたようで、内裏周辺は「内野」とよばれるようになり[5)]、室町時代にはしばし戦場となった。安土桃山時代に入り、豊臣秀吉によって平安宮跡地に聚楽第が造営されることで、平安宮造営以来の再開発の兆しが見えるが、開発がより活発になるのは江戸時代以降のことである。

江戸時代になると、平安宮内裏跡の再開発が活発になることが当時の絵図から読み取れる。17世紀前半までには下立売通沿いに町屋が成立し、さらに17世紀半ばから後半にかけては下立売通を起点に南北に千本通が延伸されたことで（「寛永十四年洛中絵図」1637年）、18世紀以降、千本通沿いにも町屋が成立する（「元禄十四年實測大絵図」（後補書題）1701年）。ただし、町屋の裏手に顕著な開発が及ぶことはなく、多くは畑地や空閑地のままであった[6)]。

（２）既往の調査（図５、表１）

周辺の調査では、中和院の区画に関連する遺構のほか、正殿の神嘉殿に関連すると考えられる遺構が検出されている。また、中和院と朝堂院の間や、北限溝近辺などにおいて整地層が確認されている。

中和院の区画に関連する遺構は、中和院北部の調査３～５と、東部の調査37で見つかっている。調査３の２～５地点、及び調査４・５では東西方向の溝状遺構を２条検出しており、中和院北面築地に伴う溝と考えられる。調査37では築地状遺構とそれを挟む南北方向の溝を２条検出しており、中和院東面築地とそれに伴う溝と考えられる。なお、調査37で検出された各溝からは10世紀後半の土器とともに焼瓦や焼壁土が出土した。10世紀後半の内裏焼亡に関連するものと推定される。

表１　周辺調査一覧表

番号	調査年度	調査方法	調査機関	主な遺構	主な遺物	文献
1	1987	試掘	埋文研	GL-0.8mで江戸時代の湿地状堆積、GL-2.4mで地山。		1
2	1987	試掘	埋文研	北半はGL-0.2mで江戸時代の湿地状堆積、GL-2.1mで地山。南半はGL-1.18～1.6mが室町時代の包含層、GL-1.6mで地山。		1
3	1994	立会	埋文研	3-1地点で平安時代の路面状遺構、3-2～5地点GL-0.7～1.1mで平安時代の東西方向の溝状遺構（中和院北限）、3-5～7地点GL-0.8mで平安時代の整地層。	土師器（土器の大半を占める）、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、緑釉瓦（3-7地点南方で出土）、緑釉鴟尾（3-7地点南方で出土）、凝灰岩（3-4地点南方で出土）	2・3
4・5	1994	立会	埋文研	平安時代中期の東西方向の溝状遺構（中和院北限）。		4～6
6	1985	立会	埋文研	GL-0.55mで平安時代の包含層。	土師器、須恵器、瓦、凝灰岩	7
7	1997	立会	埋文研	GL-0.94mで時期不明の整地層。南半は近世の掘込。		8
8	1989	試掘	埋文研	GL-3.2mで地山。		9
9	1986	立会	埋文研	GL-0.83mで無遺物層。		10
10	1987	試掘	埋文研	GL-0.9mで江戸時代の土取り穴。地山はGL-2.3mよりもさらに下。		1
11	1987	試掘	埋文研	GL-0.6mで江戸時代遺構面。地業の範囲外にあるため、GL-0.8mで地山。		1
12	1989	発掘	埋文研	北側の1トレンチではGL-1.11mで平安時代の版築を伴う掘込地業。GL-2.1mで地山。地業の範囲外の2トレンチではGL-1.0mで地山。	須恵器、瓦、緑釉瓦	9・11・12
13	1985	試掘 立会	埋文研	GL-1.07mで版築を伴う掘込地業。GL-1.65mで地山。ただし地業の範囲外ではGL-0.75mで地山。	土器、瓦	7
14	1985	立会	埋文研	GL-1.17mで平安時代中期の包含層。	土師器、瓦、凝灰岩	7
15	1984	立会	埋文研	GL-0.92～1.00mで平安時代前期の地業。GL-1.50～1.65mで地山。	土師器、須恵器	7
16	1984	試掘	埋文研	GL-0.86mで落込。GL-1.41mで地山。	土師器、瓦	13
17	1993	立会	埋文研	GL-1.19mで平安時代中期の整地層。地山はGL-1.3mよりもさらに下。	土師器、瓦	14
18	1996	発掘	埋文研	GL-0.9mで平安時代初期の整地層（南北で段差がある）。平安時代？の柱穴1基、平安時代の柱穴1基。	土師器、緑釉瓦	15・16
19	1989	立会	埋文研	内裏内郭西回廊推定地付近のGL-0.85mで基壇状遺構を検出（回廊東面化粧石）。		17
20	1975	発掘	保護課	GL-1.3mで平安時代の瓦溜。GL-1.5m付近で地山。	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦、緑釉瓦、凝灰岩、近世陶磁器、銭	18
21	1984	試掘	埋文研	GL-0.6mで江戸時代の包含層。GL-1.6～1.8mで地山。		13
22	1992	立会	埋文研	GL-1.1～2.0mで地山。		19
23	1994	立会	埋文研	GL-1.15mで近世層。地山はGL-2.1mよりもさらに下。		4
24	1984	試掘	埋文研	GL-1.43mで江戸時代の溝、土取穴。GL-2.4mで地山。	瓦、凝灰岩	13
25	1986	試掘	埋文研	GL-1.4mで江戸時代の整地層、土坑。GL-2.0～2.7mで地山。		12
26・27	1994	試掘 立会	埋文研	地山はGL-1.5mよりもさらに下。		4～6
28	1994	立会	埋文研	GL-0.4mで攪乱層。地山はGL-0.9mよりもさらに下。		4
29	1994	立会	埋文研	32-1地点では地山はGL-1.15m以下。32-2地点ではGL-0.7mで地山か。		4
30	1976	立会	平博	GL-0.7mで固くたたきしめられた暗褐色粘質土層。	瓦、緑釉瓦、伏見人形	20
31	1978	発掘	埋文研	GL-1.1mで平安時代前～中期の落込。GL-1.1～1.2mで地山。	土師器、須恵器、黒色土器（硯）、瓦器、緑釉陶器（香炉）、灰釉陶器（浄瓶）、瓦、緑釉瓦、鴟尾、凝灰岩、近世陶磁器	21・22
32	1973	発掘	保護課	GL-1.7mで地山。	瓦、緑釉瓦	23
33	1979	発掘	埋文研	GL-0.7mで平安時代？の柱穴4基、平安時代の瓦を含む近世の土取穴、地山。近世の土取穴はGL-2.0mよりもさらに下まで掘り込む。	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦、緑釉瓦、鴟尾、凝灰岩	24・25
34	1974	発掘	保護課	GL-0.2mで土器溜め穴。平安時代の遺構なし。	土師器、須恵器、施釉陶器、瓦、緑釉瓦、凝灰岩、金糸	26
35	1984	発掘	埋文研	GL-0.0～0.15mで平安時代初頭の土坑（土坑8・9・22は良好な一括資料）。	土師器、須恵器、緑釉陶器（羽釜）、灰釉陶器、瓦、緑釉瓦、凝灰岩、鈎帯、泥面子	27
36	1987	発掘	埋文研	GL0.1～0.3mで東西にのびる瓦の帯状分布と、それを境に南北で異なる整地層。10世紀後半の火災痕跡あり。	土師器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、瓦、緑釉瓦	28
37	1987	試掘	埋文研	GL-1.0～1.6mで築地状遺構とそれを挟む南北溝（中和院東限）。10世紀後半の火災痕跡あり。	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦、緑釉瓦	29
38	1991	立会	埋文研	GL-0.1mで暗褐色砂泥層（時期不明）。	瓦	30
39	1982	発掘	埋文研	GL-0.2mで近世土取穴、平安時代初期の土坑（SX4・9は良好な一括資料）。掘り込みを受けていない地点ではGL-0.4mで地山。	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器（甑、火舎）、墨書土器、土馬、瓦、緑釉瓦、凝灰岩	31
40	1988	立会	埋文研	GL-0.4mで平安時代の整地層、GL-0.55mで地山。		32

※京都市文化財保護課は保護課、京都市埋蔵文化財研究所は埋文研、平安博物館は平博と略した。土器は特筆される器形がある場合のみ（ ）内に示した。

図５　周辺調査位置図（１：2,500）

神嘉殿に関連すると考えられる遺構は、中和院中央部の調査12・13で見つかっている。調査12では現地表下1.11ｍで版築を伴う掘込地業、調査13では現地表下1.07ｍで調査12と同様の遺構が見つかっている[7)]。掘込地業の規模は、調査12・13で南端を確認しており、南北７ｍ以上、東西は調査12から調査13までで12.5ｍ以上[8)]、深さは調査12で1.0ｍ以上あることを確認している。版築は、調査12で厚さ１～10㎝の層を20数層、調査13で厚さ６㎝前後の層を９層確認している[9)]。これらの調査のほかに、調査３－５～７地点、調査17・18では、平安時代の整地層が確認されている。なお、調査18では平安時代とみられる柱穴１基と、平安時代の柱穴１基を検出している。中和院中央部の調査12～18の出土遺物は、土師器の出土量が多く、緑釉瓦や瓦、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器の出土量が少ない点が特徴である。

中和院南部については、これまで平安時代の明確な遺構は検出されていない。調査33では一辺約0.3ｍの方形掘形をもつ柱穴が地山面で４基検出されており、平安時代の可能性があるものの時期は明らかでない。

註

１）　石田志朗「京都盆地北部の扇状地　－平安京遷都時の京都の地勢－」『古代文化』第34巻 第12号 1982年

河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 2001年

２）　鈴木　亘「第七章　平安宮内裏の形成過程」『平安宮内裏の研究』 中央公論美術出版　1990年

3）　裏松固禅『大内裏図考証』改訂増補 故実叢書26巻　故実叢書編集部　1993年

4）　本 弥八郎「Ⅲ　平安宮内裏跡（HQ89)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』 京都市文化観光局　1988年

『新訂増補國史大系　百錬抄』 吉川弘文館　1979年

「新造内裏并中和院大極殿東西楼朝集堂等焼亡。」天喜六年二月二十六日条

「記云。神嘉殿遷都以後未有火事。此度始焼亡。」天喜六年三月二十五日条

「内裏及中院焼亡。」永保二年年七月二十九日条

「左馬寮。典薬寮。中院等焼亡。」長寛元年十二月十三日条

『大日本史料　第三編之十三』 東京大学史料編纂所　1990年

「中院西面有放（火）事、雖 然滅了、」『殿暦』天永三年十二月二十九日条

「今日内裏中院有放火事、」『中右記』天永三年十二月二十九日条

『新校群書類従　第五巻』 名著刊行會　1978年

「後清録記云。（中略）次中和院同以炎上之時。」『清獬眼抄』長寛元年十二月十二日条

「後清録記云。（中略）中和院先年焼亡。」『清獬眼抄』安元三年四月二十八日条

5）『新校群書類従　第十六巻』 名著刊行會　1977年

「佐々木ノ治部少輔高詮ハ七百余騎ニテ一條ノ大路ヲ前ヘ當テ、北野ノ森ヲ背ニシテ、大嘗會畠ニ（ゾ）陣ヲ取ル。」『明徳記　上』明徳二年十二月二十六日条

角田文衛「内野」『平安時代史事典　上』 角川書店　1994年

6）『慶長昭和京都地図集成』 柏書房　1994年

「寛永十四年洛中絵図」寛永十四年

「元禄十四年實測大絵図」（後補書題）　元禄十四年

7）　調査15でも同様の遺構が見つかっている。報告書では「地業とみられる整地層」という表現に留まっているが、調査12・13と地業検出高や地山検出高が近いため、同様の掘込地業の可能性もある。

8）　調査15を含めると、地業の東西幅は40ｍ以上となる。

9）　調査15では厚さ20㎝前後の層を少なくとも４層確認している。

表１　周辺調査一覧表　文献

1　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』 京都市文化観光局　1988年

2　「３　平安宮内蔵寮～中和院跡」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

3　「40　中和院－内蔵寮跡（1476)」『平安宮Ⅰ　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

4　『京都市内遺跡立会調査概報　平成６年度』 京都市文化市民局　1995年

5　「45　朝堂院－内蔵寮跡（1539・1546)」『平安宮Ⅰ　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

6　「２　平安宮朝堂院跡～内蔵寮跡」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

7　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』 京都市文化観光局　1986年

8　『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』 京都市文化市民局　1998年

9 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』 京都市文化観光局　1990年
10 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』 京都市文化観光局　1987年
11 「Ⅰ　平安宮中和院」『平安京跡発掘調査概報　平成元年度』 京都市文化観光局　1990年
12 「２　平安宮中和院跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年
13 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』 京都市文化観光局　1985年
14 『京都市内遺跡立会調査概報　平成５年度』 京都市文化市民局　1994年
15 『京都市内遺跡試掘調査概報　平成８年度』 京都市文化市民局　1997年
16 「２　平安宮中和院跡」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998年
17 「１　平安宮内裏・縫殿寮・長殿・率分蔵跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年
18 「平安宮真言院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』 京都市文化観光局文化財保護課　1976年
19 『京都市内遺跡立会調査概報　平成４年度』 京都市文化市民局　1993年
20 「平安宮中和院の立会調査」『古代文化』第30巻第５号　財團法人古代學協會　1978年
21 「８　平安宮中和院跡」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年
22 「（１）－６　78HK-CC001　平安宮中和院」『令和元年度　重要遺跡出土文化財整理報告』 京都市文化市民局　2020年
23 「中和院跡発掘調査概要」『平安宮跡　京都市埋蔵文化財年次報告1973－Ⅰ』 京都市文化観光局文化財保護課　1974年
24 「Ⅳ　平安宮中和院跡」『平安京発掘調査概要　1979年度　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要」 京都市文化観光局　1980年
25 「（１）－20　79HK-CC002　平安宮中和院」『令和元年度　重要遺跡出土文化財整理報告』 京都市文化市民局　2020年
26 「中和院跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡　京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅰ』 京都市文化観光局文化財保護課　1975年
27 「Ⅰ　平安宮中和院」『平安京跡発掘調査概報　昭和59年度』 京都市文化観光局　1985年
28 「Ⅱ　平安宮中和院南」『平安京跡発掘調査概報　昭和62年度』 京都市文化観光局　1988年
29 「Ⅲ　平安宮内裏跡（HQ89）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』 京都市文化観光局　1988年
30 『京都市内遺跡発掘調査概報　平成３年度』 京都市文化観光局　1992年
31 「第１章　内裏外郭跡」『平安京跡発掘調査概報　昭和57年度』 京都市文化観光局　1983年
32 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』 京都市文化観光局　1989年

３．遺　　構

（１）基本層序（図版２・３）

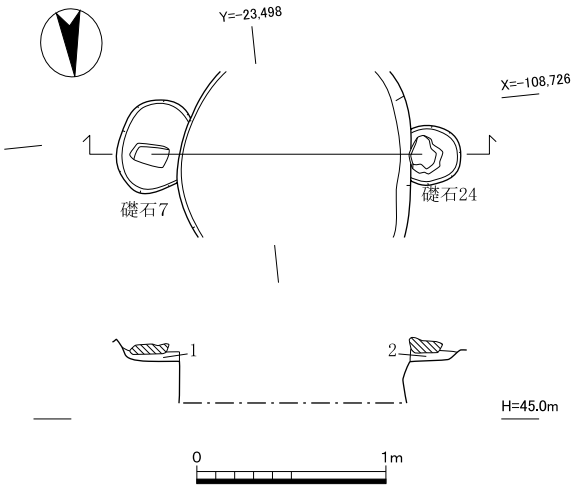
現地表面から順に近現代盛土、江戸時代の整地層（現地表下0.32ｍ以下）、基盤層（地山、現地表下2.56ｍ以下）となる。遺構は主に江戸時代の整地層上面で検出した。江戸時代の遺構面は、調査区東部で標高45.5ｍ、西部で標高45.1ｍと、千本通沿いの東部から西部にかけて緩やかに下がる。また、調査区の南壁際および西壁際で幅約２ｍの断ち割り調査を行い、基盤層上面で江戸時代の土取り土坑を多数検出した。

（２）検出遺構（図版１・５）

礎石７・24（図６、図版５）　北東部で検出した礎石２基である。東西方向に約1.5ｍ間隔で並ぶ。掘形の規模は、礎石７が直径約0.4ｍ、礎石24が直径約0.2ｍで、いずれも深さは約0.05ｍある。

礎石25　南東部で検出した。掘形はなく、下半は暗褐色砂泥（南壁10層）に埋まる。

地下室19（図版４・６）　南東部で検出した素掘りの地下室である。規模は東西約2.7ｍ、南北1.2ｍ以上である。掘形は検出面から約0.8ｍあり、北壁際中央部の掘形底面には礎石を据える。底面には床面構築土を施しており、構築土の黒褐色土層から寛永通寶１枚が出土した。



１　10YR4/4褐色砂泥（シルト混じり）　炭少量
２　10YR4/4褐色砂泥　φ6㎝以下の礫少量

図６　礎石7・24実測図（１：40）

地下室20（図版４・６）　南東部で検出した素掘りの地下室である。東側は調査区外へのび、南西側は地下室19に失われているが、規模は東西2.2ｍ以上、南北約1.8ｍである。南側の一部はさらに南へ約0.9ｍ張り出しており、平面形態がＬ字形であったか、あるいは方形で入口がついていたとみられる。深さは検出面から約0.75ｍあり、壁面は緩やかに傾斜する。床面には人頭大の石材が南北に２つ並んでおり、礎石の可能性がある。

地下室内の堆積状況については大きく２層に分かれる。上層は砂礫層などで、下層は黒褐色砂泥

表２　遺構概要表

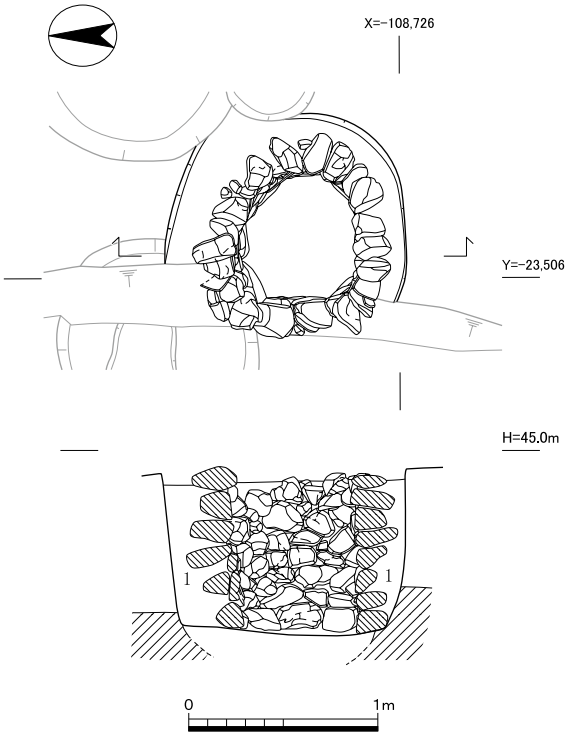
時　　代	遺　　構	備　　考
江戸時代	礎石７・24・25、地下室19・20、水溜23・32、 炉状遺構28・29、埋甕18、土坑21・34、土取り土坑	

層である。下層からは18世紀半ば頃の土師器皿とともに磁器・漆器・銭貨・貝殻などが出土した。裏面に「佐」字を配した寛永通寶が出土しており、遺構の上限年代を1714年に位置づけることができる。

水溜23（図７、図版５） 北西部で検出した円形石組の水溜である。規模は掘形の直径約1.2ｍ、石組の内径約0.65ｍ、検出面からの深さ約0.8ｍあり、0.2ｍ前後の石材を小口積みする。石とともに平安時代の塼の破片を少量用いる。

水溜32 北西部で検出した素掘りの水溜である。規模は直径1.1ｍ前後、検出面からの深さ約1.2ｍある。

炉状遺構28・29（図８、図版６） 中央南側で東西に並んで検出した。上半は大きく削られ遺存状況は悪い。炉状遺構28は規模が南北0.65ｍ以上、東西0.75ｍ以上、深さは底面から約



1　10YR3/1黒褐色砂泥（やや粘質）炭少量

図７　水溜23実測図（１：40）

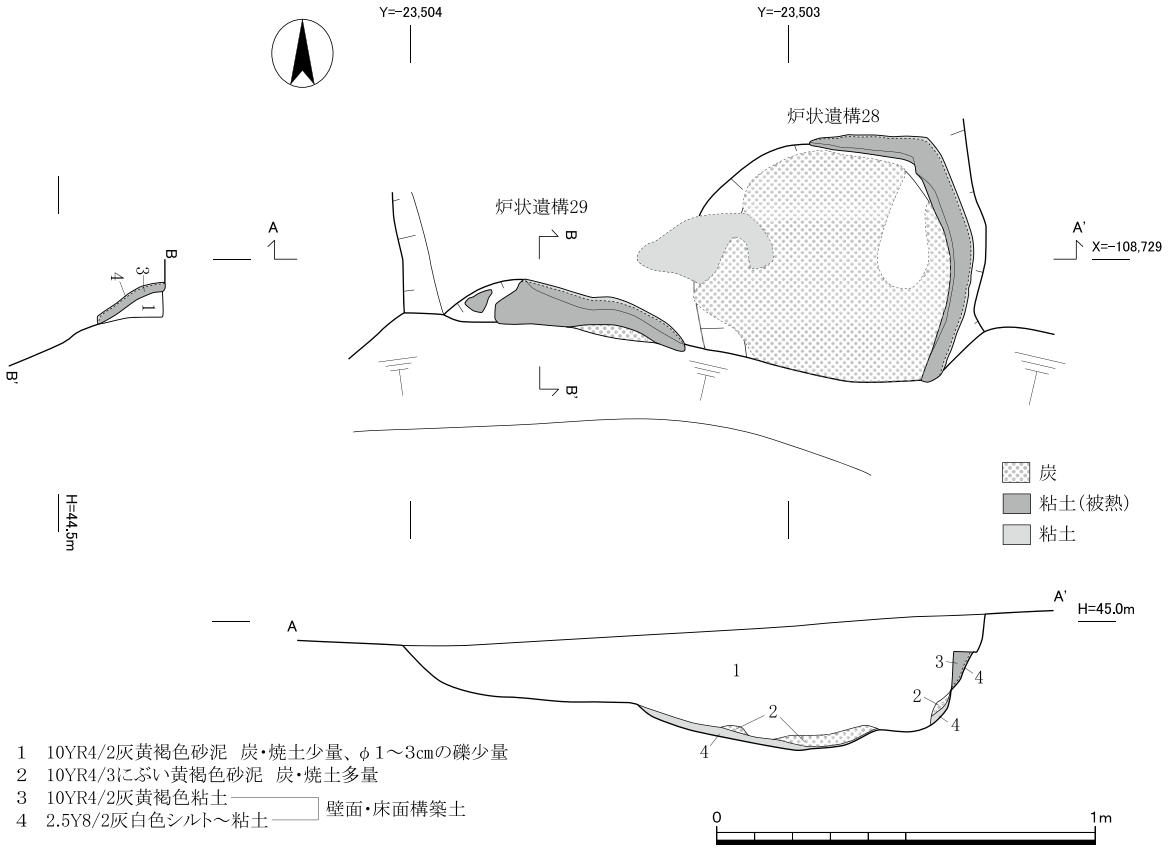


図８　炉状遺構28・29実測図（１：20）

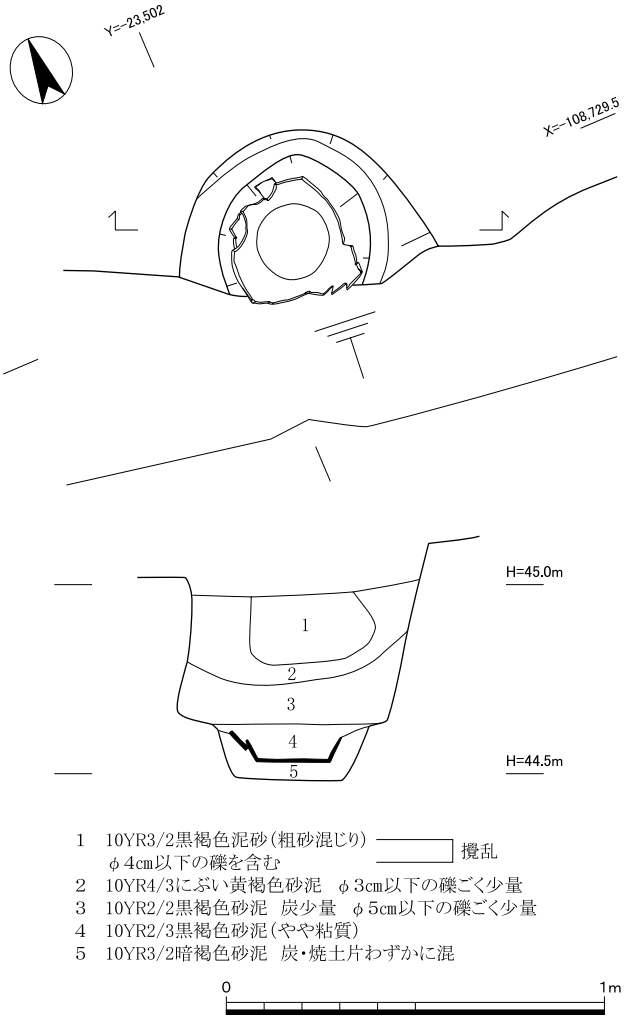


図９　埋甕18実測図（１：20）

0.25ｍ残存する。炉状遺構29の残存規模は南北約0.1ｍ、東西約0.6ｍ、深さ約0.15ｍである。いずれも壁面粘土の表面は被熱して灰黄褐色に変色する。炉状遺構28・29は共に灰黄褐色砂泥で埋められており、その範囲は南北1.3ｍ以上、東西1.65ｍである。炉またはカマドと考えられる。

埋甕18（図９、図版６）　中央南側で検出した。掘形の規模は直径0.6～0.7ｍ、検出面からの深さ約0.6ｍある。掘形底面付近で据えた状態の大甕の底部を検出した。

土坑21　北西部で検出した。規模は直径約1.2ｍ、検出面からの深さ約0.6ｍある。18世紀中葉から後葉に属すると考えられる土師器・焼締陶器・磁器・つぼつぼが出土したが、細片のため図化できなかった。その他に鏡の鋳型、平安時代の緑釉陶器香炉が出土した。

土坑34　中央部で検出した小型の円形土坑である。規模は直径約0.4ｍ、検出面からの深さ約0.5ｍある。

整地層　調査区全域で検出した層で、土取り後に一気に盛土・整地したものである。厚さは最大で約2.05ｍある。上述の遺構はすべてこの整地層上面で検出した。

整地の工程については、南壁断面の観察により次のように復元できる。地山面に掘り込まれた不定形な土取り土坑に一定の高さまで水平に盛土・整地したあと（南壁45～62層）、南壁中央部に断面畦状の盛土を行い（南壁26・30・43・44層）、それを基点に西側と東側へそれぞれ盛土・整地する。なお、東側では基本的に厚さ10㎝程度の単位で水平に整地をし、土はよく締まる（南壁17・22～25・29・36・40層）。これに対し、西側では厚さ20㎝程度の単位で整地をし、土は東側と比較して締まりがない（南壁13～16・19～21・27層）。なお、この東側と西側での整地の明らかな違いは、整地層上面で成立する遺構の性格にも反映されている。そのため、この整地は宅地利用を前提にして行われたものと推定している。

４．遺　　物

遺物は整理コンテナ23箱分が出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・土製品・金属製品・石製品・木製品があり、全体の半数以上を瓦類が占める。時代としては平安時代と江戸時代の大きく２時期に分かれる。

平安時代の遺物は、土器類・瓦類・凝灰岩があり、特筆すべき遺物に緑釉瓦がある。江戸時代の遺物は、土器類・瓦類・鋳造関係製品などがある。その他、金属製品・石製品・漆器が出土している。

（１）土器類（図10～12、図版７・８、付表１）

今回の調査で出土した土器類は、大半が江戸時代のものである。平安時代の土器類は緑釉陶器椀・香炉、土師器皿・高杯・甕があるが、点数は10点に満たず、図化できたものは土坑21から出土した猿投産の緑釉陶器香炉（１）の１点に限られる（図10）。

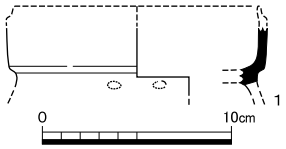


図10　緑釉陶器香炉実測図
（１：４）

以下では、江戸時代の土器類について遺構ごとに述べる。

整地層出土土器（図11、図版７）　土師器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器・磁器が出土した。２・３は土師器の皿Sbで、口径は8.7～9.0㎝である。４は京焼の丸椀である。外面には緑色の松竹文が絵付けされ、一部金彩を施す。５は唐津焼の片口鉢で、体部外面に櫛刷毛目を施す。６は信楽焼の壷で、いわゆる腰白茶壷である。肩部３箇所に耳が取り付き、底部は糸切り痕がのこる。７は信楽焼の擂鉢である。口縁部は直立し、外面に多条の凹線を施す。内面の擂目は全面に施す。８は備前焼の鉢で、体部から口縁部にかけて直線的に内傾する。形態から建水か水指と考えられる。９は肥前系染付の大皿である。いわゆる芙蓉手で、底部内面に獅子文を描く。文様は比較的精緻で、発色も良好である。高台内側にはハリ支えの痕跡がみられるが、器面中央は焼きへたりによりやや凹む。高台内側に「大明□」の文字を配する。これらは18世紀前葉から中葉に属する土器群である。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、緑釉陶器、緑釉瓦、瓦、塼、凝灰岩		緑釉陶器１点、緑釉瓦６点、瓦18点、塼１点		
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、磁器、瓦、鋳造関係製品、金属製品、石製品、漆器		土師器20点、施釉陶器14点、焼締陶器５点、輸入陶磁器１点、磁器９点、鋳造関係製品２点、金属製品８点、銭貨12点		
合　計		30箱	97点（７箱）	０箱	23箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より７箱多くなっている。

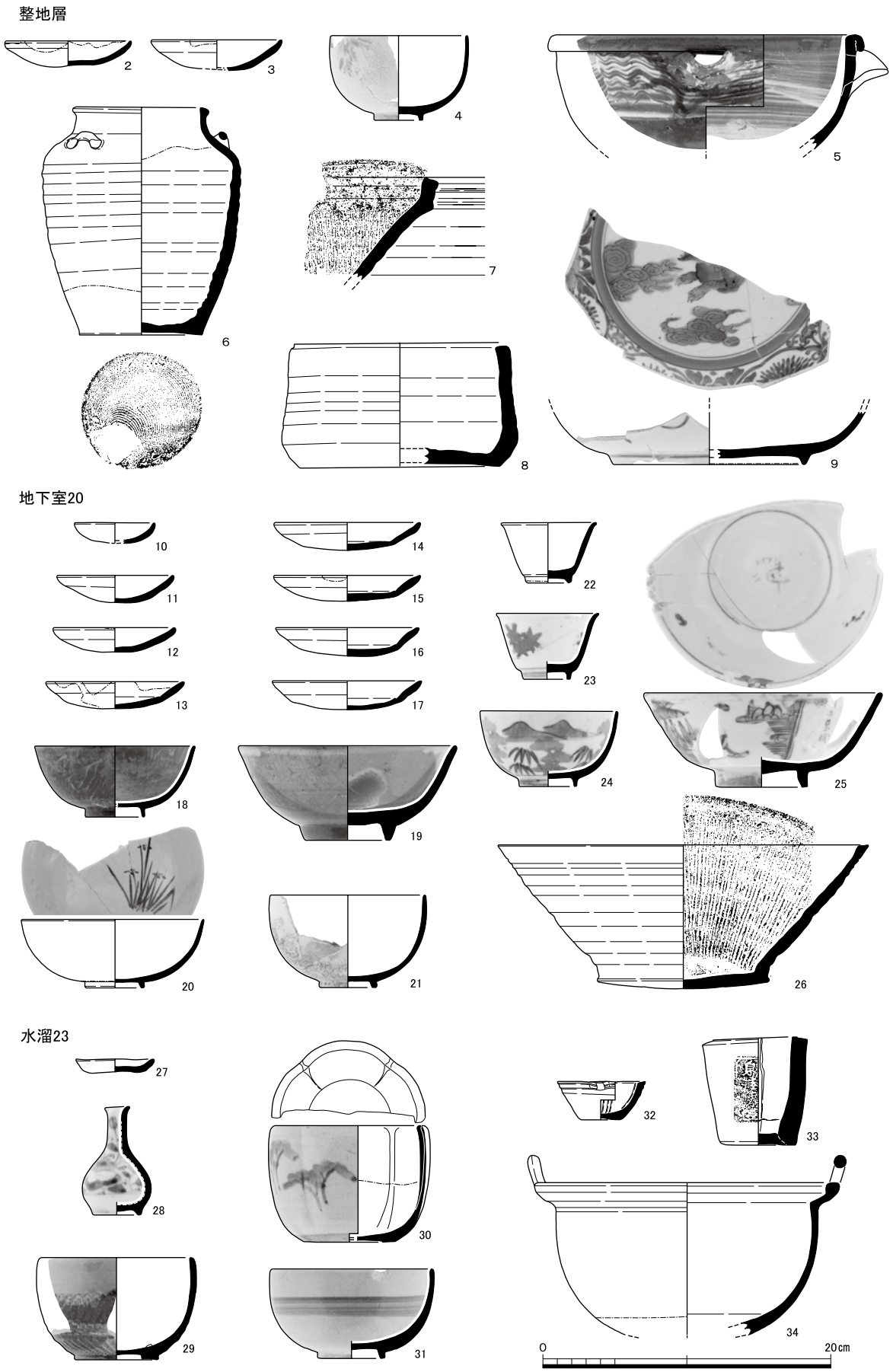


図11　整地層・地下室20・水溜23出土土器実測図（1：4）

地下室20出土土器（図11、図版７）　土師器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器・磁器が出土した。10～17は土師器皿である。10は皿Ｎで口径5.6㎝、11・12は皿Sbで口径8.1～8.4㎝、13～17は皿Ｓで口径9.6～10.3㎝である。18・19は唐津焼の椀で、18は体部内外面に打刷毛目を施したあと体部下半に刷毛を１周させる。器壁は２～５㎜と薄く、高台は７㎜と高い。19は体部に釉薬をつけ掛けしたあと底部内面を蛇の目釉剥ぎする。20・21は京焼の椀である。20の平椀は内面に菖蒲の銹絵を描く。21の丸椀は無文である。22～24は肥前系の磁器椀で、22は無文、23・24は体部外面にコンニャク印判を施す。24は松竹文を手描きする。25は中国漳州窯の赤呉須鉢で、体部外面には北宋の蘇軾（1037～1101年）が詠んだ「赤壁賦」の銘文と、その情景が描かれる。見込みに「魁」字を配する。26は信楽焼の小型の擂鉢である。口縁端部は外上方につまみ出し、内面の擂目を全面に施す。これらは18世紀中葉から後葉に属する土器群である。

水溜23出土土器（図11、図版８）　土師器・焼締陶器・施釉陶器が出土した。27は土師器の皿Ｎで、口径5.4㎝である。28は肥前系染付の徳利で、外面に草花文を描く。29～31・34は京焼である。29は椀で、底部削り出しで幅1.2㎝の幅広な高台を作り出す。体部外面に飛鉋を施す。30は火入れで、口縁部は４箇所ヘラで押圧して輪花形に作る。高台は碁笥底である。体部外面には光琳松を描き、口縁端部内面から体部外面にかけて施釉する。31は京・信楽系の椀で、体部外面中位に刷毛による条線を１周させる。信楽・石塔窯の製品と共通した意匠をもつ。見込みに３箇所目跡を残す。34は鍋で、底部外面に煤が付着する。32はミニチュアの擂鉢で、内面に３本１単位の擂目を放射状に５単位施す。33は板作り成形の塩壷で、外面に「泉湊伊（織）」銘を刻印する。32・33はともに土師質である。これらは18世紀中葉から後葉に属する土器群である。

水溜32出土土器（図12、図版８）　土師器・施釉陶器・磁器が出土した。35は肥前系染付の椀で、口縁部外面に雨降文を施す。36は肥前系の無文椀である。37は京・信楽系の丸椀で、体部外面に松竹梅文を描き、見込みに推定３箇所の目跡を残す。38は肥前系染付の皿で、見込みにコンニャク印判と手描きの文様を施す。これらは18世紀後半に属する土器群である。

炉状遺構28・29出土土器（図12）　土師器・焼締陶器・施釉陶器が出土した。39～41は土師器である。39・40は皿Ｓで口径10.3～10.8㎝。41は焜炉で体部内面に突起が取り付く。これらは18世紀半ば頃に属する土器群であると考えられる。

埋甕18出土土器（図12、図版８）　土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器が出土した。42は肥前系京焼風陶器の平椀である。見込みに銹絵で楼閣山水文を描く。高台内側には刻印を施すが、一部欠損しているため判読できない。43は信楽焼の甕である。体部内外面に泥漿を施す。これらは18世紀半ば頃に属する土器群である。

土坑34出土土器（図12）　土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器が出土した。44～47は土師器である。44は皿Ｎで口径5.0㎝。45～47は皿Ｓで口径9.8～11.5㎝。48は京焼で、体部欠損のため器形不明であるが、高台内側に「清」字の刻印を施す。49は肥前系染付の椀である。体部外面に松竹梅文、高台内側に「福」字を手描きする。50は堺・明石系の擂鉢である。内面に擂目を施したあと、擂目上端部をナデ消す。これらは18世紀中葉から後葉に属する土器群である。

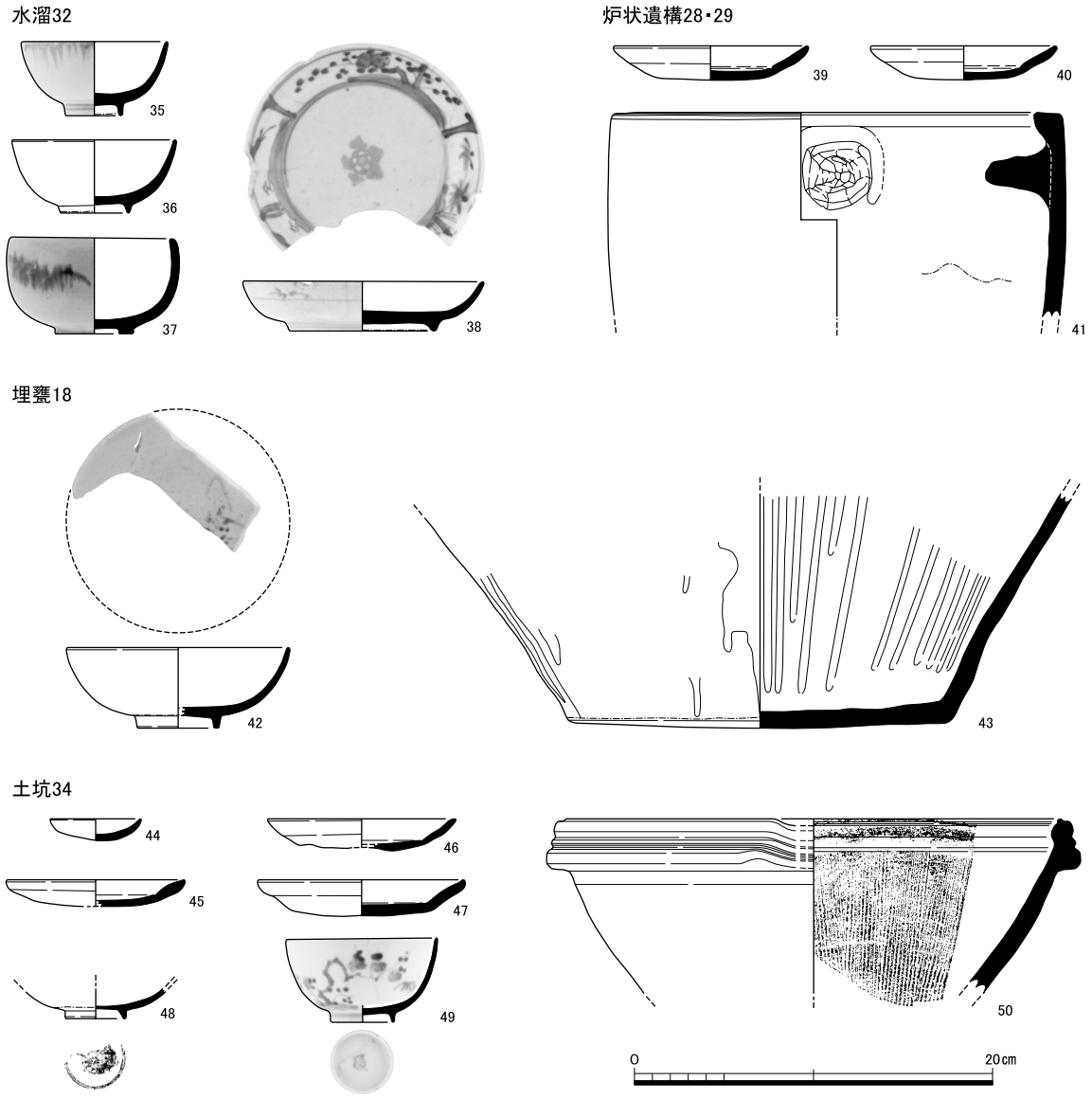


図12　水溜32、炉状遺構28・29、埋甕18、土坑34出土土器実測図（１：４）

（２）瓦類（図13・14、図版９、付表２）

今回の調査で出土した平安時代の瓦は、破片数にして506点であった。うち瓦当が12点（軒丸瓦５点、緑釉軒平瓦１点、軒平瓦６点）、緑釉瓦が72点（軒平瓦１点、丸瓦47点、熨斗瓦１点、不明23点）、筑前産の瓦が41点（丸瓦11点、平瓦30点）、縄タタキを施す瓦が382点（丸瓦78点、平瓦304点）であった。このうち、文字の刻印された平瓦が１点、緑釉の飛沫が付着した平瓦と丸瓦が各１点みられる。大半が整地層から出土した。

瓦１～５は軒丸瓦で、瓦１～3は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦１は平安宮朝堂院に同文が[1)]、瓦３は栗栖野瓦窯産に類例がある[2)]。瓦４は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、栗栖野瓦窯産と同文である[3)]。瓦５は単弁六葉蓮華文軒丸瓦で、播磨産である。瓦１・２・４・５は整地層出土。瓦３は地下室19壁面構築土（黄褐色粘土）出土。

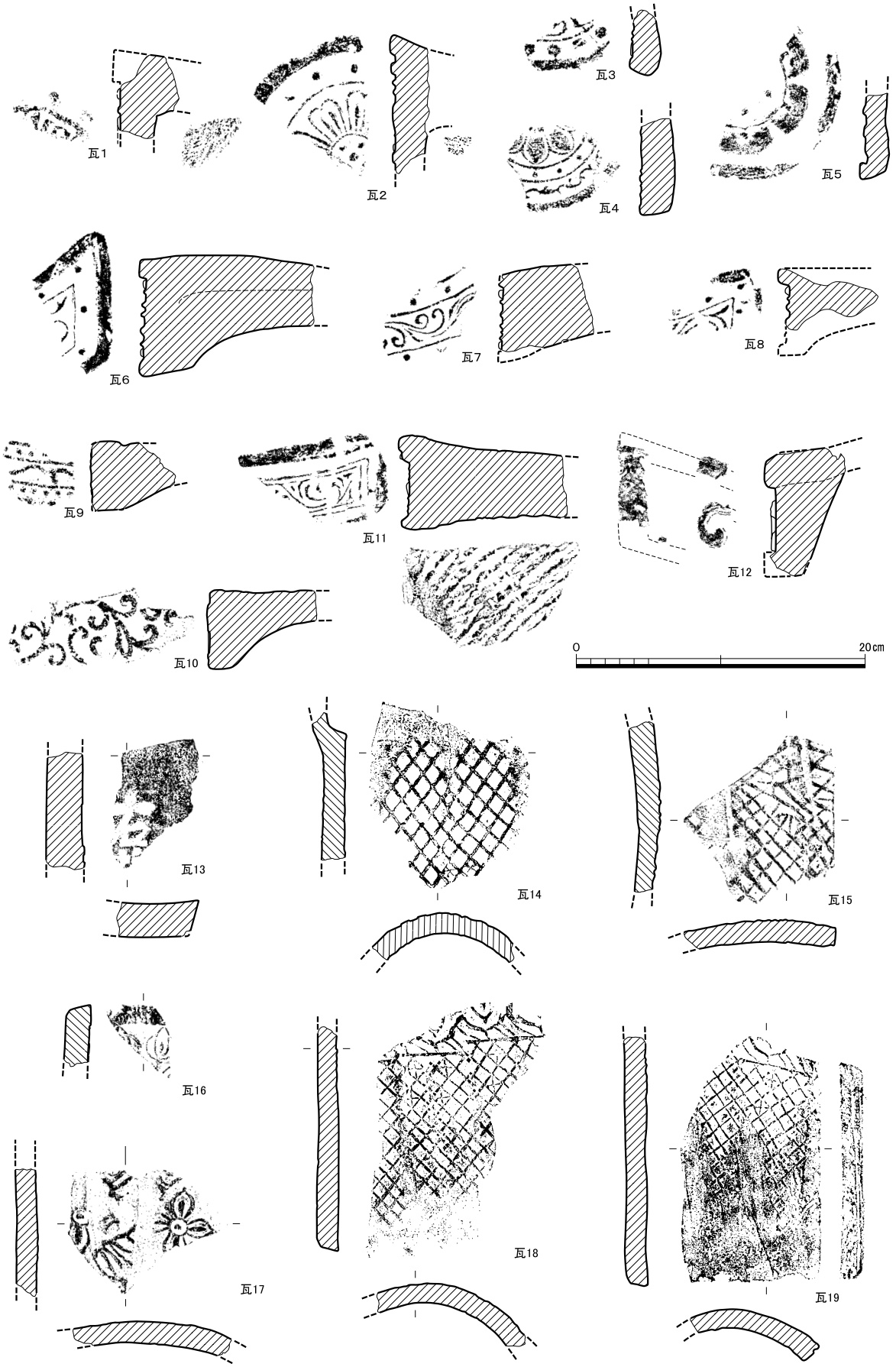


図13　瓦類拓影及び実測図（1：4）

瓦６～12は軒平瓦である。瓦６は緑釉均整唐草文軒平瓦で、栗栖野瓦窯HT201型式と同文[4]。瓦７は均整唐草文軒平瓦である。西賀茂角社西群瓦窯NS209型式と同文で、平安宮内裏、朝堂院に出土例がある[5]。瓦８は均整唐草文軒平瓦で、右上珠文の下に笵傷がある。平安宮朝堂院、内裏のほか、民部省に出土例があり、栗栖野瓦窯産・小野瓦窯産と同文[6]。瓦９は偏行唐草文軒平瓦である。栗栖野瓦窯産と同文で、高陽院に出土例がある[7]。瓦10は均整唐草文軒平瓦で、讃岐産である。瓦11は均整唐草文軒平瓦である。同文の可能性のあるものが平安宮内裏、豊楽院および民部省から出土している[8]。瓦12は巴文軒平瓦である。安土桃山時代の大型の瓦で、立地的にみて聚楽第所用の瓦であると考えられる。瓦６～10は整地層、瓦11は土坑３出土。瓦12は表面採集。

瓦13は文字瓦である。平瓦凹面に「右坊」の刻印を施す。池田瓦窯出土の「右坊城」銘の文字瓦と同印である[9]。整地層出土。

瓦14～19は筑前産の瓦である。瓦14は丸瓦の破片である。凸面に斜格子の叩きを施し、いくつかの斜格子の中に「大」字を配する。ほかに４点出土しており、側面の残存する破片には桶巻き造りによる分割痕が残る。いずれの破片も凹面の布目は粗くよれる。平安宮朝堂院に出土例がある[10]。瓦15は平瓦の破片で、凸面に斜格子の叩きを施す。凹面には桶巻き作りによる分割突帯の痕跡がある。瓦16・17は平瓦の破片で、ともに凸面に花文状の叩きを施す。瓦18・19は平瓦の破片で、凸面上部に花文状の叩きを施し、下部に斜格子の叩きを施す。いくつかの斜格子の中に「十」字を配する。瓦19の側面には桶巻き作りによる分割痕が残る。瓦16～19の凸面タタキ板については同原体である可能性があり、平安宮豊楽院、朝堂院、福岡県鞍手郡鞍手町に出土例がある[11]。ほかに１点出土している。瓦14は重機掘削時採集、瓦15～19は整地層出土。

瓦20～24は緑釉瓦片である。瓦20は熨斗瓦で、凸面と側面に緑釉を施す。また凹面に緑釉が付着している。なお破断面にも緑釉が付着しているが、凸面から亀裂が生じて緑釉が侵入したものとみられる。瓦21～24は丸瓦である。瓦21・22は丸瓦部から玉縁にかけての破片で、ともに丸瓦部凸面に緑釉を施す。瓦21は玉縁に緑釉を施さないが、瓦22は玉縁にも緑釉を施す。瓦23・24は丸瓦部の破片で、ともに丸瓦部凸面に緑釉を施す。瓦24は緑釉が暗赤褐色に変色しているが、二次的な被熱痕跡がみられないことからも、焼成時の温度変化によるものであると考えられる。端面には緑釉を施さない。瓦20はあげ土、瓦21～24は整地層出土。

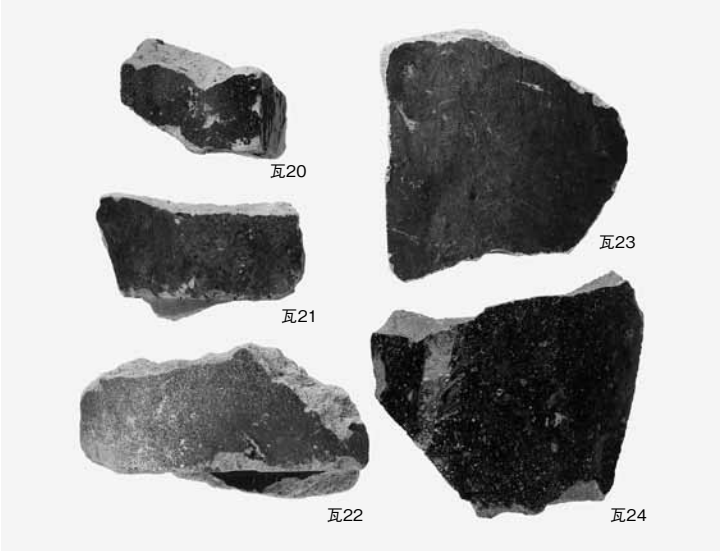


図14　緑釉熨斗瓦・丸瓦片

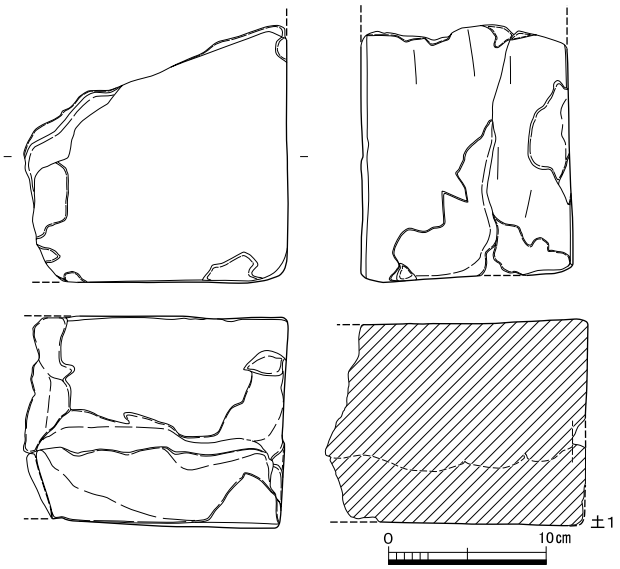


図15　塼実測図（１：６）

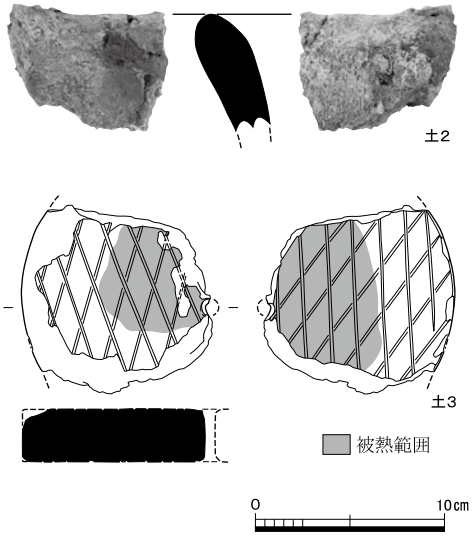


図16　鋳造関係製品実測図（１：４）

（３）土製品（図15・16、図版９、付表３）

土製品は、平安時代の塼と江戸時代の鋳造関係製品がある。

土１は塼である。残存長16.0㎝、残存幅14.4㎝、厚さ13.4㎝である。残存する４面のうち１側面にはケズリの痕跡がみられるが、ほかの３面は摩耗しており調整不明である。西賀茂角社西群瓦窯出土の塼ｄ類と類似する[12]。水溜23の石組に転用された状態で出土した。

土２は坩堝である。口縁部は大きく内傾する。内外面にガラス状の物質が付着している。水溜32から出土した。

土３は鏡の鋳型である。鋳型中央の孔から外縁部までが残存し、外縁部は円弧を描きつつも途中で直線気味になることから、柄鏡の鋳型の鏡面部分の破片であると考えられる。鋳型中央の孔径は0.9㎝、厚さは2.8㎝である。鏡面部分の鋳型径は20.0㎝で、平安京左京四条四坊四町出土鋳型の分類では鋳型５類に相当する[13]。真土は残存せず、両面とも格子目の刻みが露わになっている。両面に被熱がみられる。被熱は鋳型中央部から直径11.9㎝の範囲内にみられ、鋳型５類が径４寸（約12㎝）の柄鏡の鋳型であると推定されていることと関係する可能性がある。土坑21から出土した。

（４）金属製品（図17・18、図版10、付表４・５）

金属製品は大半が地下室20から出土したもので、地下室20からは銭貨・雁首銭・柄鏡・火箸・金槌の頭・鉄釘・銅線などが出土した。地下室20出土銭貨は計64枚（寛永通寶60枚、治平元寶・嘉祐通寶・熙寧元寶・□武通□が各１枚）を数える[14]。

金１は雁首銭である。煙管の火皿部分を切り取ったものを上から叩き潰し、有孔円形の銭貨形とする。金２～３は煙管で、金２は吸口、金３は雁首である。金４は金槌の頭部である。中央に長さ1.8㎝、幅0.5㎝の枘穴があるほかに、直径0.5㎝の孔が縦方向に貫通する。金５は柄鏡である。柄の

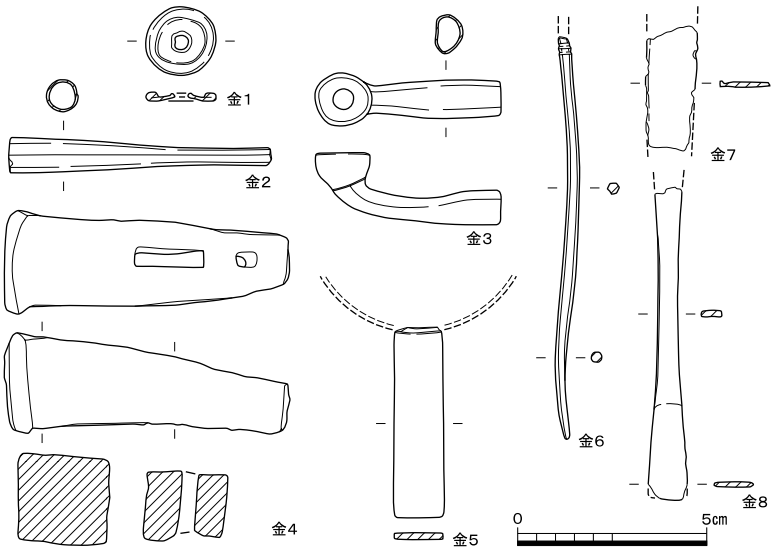


図17　金属製品実測図（１：２）

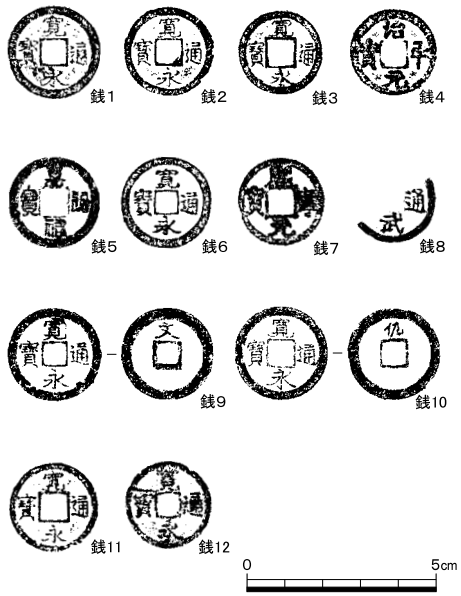


図18　銭貨拓影（１：２）

み残存し、柄長は4.85㎝である。柄の長さから17～18世紀のものと推定する。金６は火箸である。上端意匠部分は欠損しており不明であるが、上端意匠と本体との境界に２条の沈線を巡らす。下端は先細して途中で欠損する。断面は六角形を呈する。金７・８は不明金属製品である。金１～６は地下室20、金７・８は水溜23出土。

銭１～12は銭貨で、銭１～３・６・９～12は寛永通寶である。銭６以外は新寛永で、銭２は孔右下にバリが残る。銭９は裏面上部に「文」字を配する。銭10は裏面上部に「佐」字を配しており、初鋳は1714年である。銭４は治平元寶である。北宋銭で初鋳は1064年。真書体である。銭５は嘉祐通寶である。北宋銭で初鋳は1056年。篆書体である。銭７は熙寧元寶である。北宋銭で初鋳は1068年。真書体である。銭８は□武通□である。左上半分が欠損するため種類は特定できないが、洪武通寶（1368年初鋳）か昭武通寶（1678年初鋳）である。いずれにしても明銭である。銭11は炉状遺構28・29、銭12は地下室19床面構築土、銭１～４は地下室20下層上面検出時、銭５～10は地下室20下層から出土した。

（５）その他の遺物（図版10）

地下室20から貝類・骨類が出土した。各種名称とその出土点数（括弧内の数字は最小個体数）は次のとおりである。貝類はシジミ科２点（１点）・セタシジミ23点（14点）・フネガイ科１点（１点）・アカガイ３点（２点）・ハマグリ14点（８点）・バイ１点（１点）・アワビ類１点（１点）がある。骨類はネズミ科の大腿骨１点（１点）がある。なお、遺物は視認できたもののみ採集をしており、水洗篩別による採集は行わなかった。

このほか、地下室20から漆器が２点出土したが、遺存状態が悪く図示できなかった。

註

１）『平安京古瓦図録』 平安博物館　1977年　221頁 No.8

２）『木村捷三郎収集瓦図録』 京都市埋蔵文化財研究所　1996年　図版８ No.28

３）『木村捷三郎収集瓦図録』 京都市埋蔵文化財研究所　1996年　図版９ No.48

４）網伸也「平安宮造営と瓦生産」『古代文化』第57巻第11号　財團法人古代學協會　2005年

５）『平安京跡研究調査報告 第４輯』 古代學協會　1988年　81～83頁

『平安京古瓦図録』 平安博物館　1977年　237頁 No.327・328

６）『平安京古瓦図録』 平安博物館　1977年　235頁 No.367・368

『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告第15冊』 京都府　1934年　第19図 No.2

『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』 京都市文化市民局　2005年　31頁 図30 No.30

『令和２年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2021年　55頁 No.108

７）『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 平成４年度』 京都市文化観光局　1993年　図26 No.77

『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』 京都市文化観光局　1982年　図版12 No.43

８）『平安京古瓦図録』 平安博物館　1977年　242頁 No.472

９）『大谷中・高等学校内発掘調査報告書』 大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会　1984年　図版35 No.19

10）『平安京古瓦図録』 平安博物館　1977年　248頁 No.658

11）『平安京古瓦図録』 平安博物館　1977年　334頁 第４図 No.1、247頁 No.603、248頁 No.652

12）『平安京跡研究調査報告 第４輯』 古代學協會　1988年　92頁 第54図

13）『京都文化博物館調査研究報告 第９集』 京都文化博物館　1993年

14）『日本貨幣カタログ　2013年版』 日本貨幣商協同組合　2012年

参考文献

九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会　2000年

斎藤菊太郎『陶磁大系』第45巻 呉須赤絵 南京赤絵　平凡社　1976年

角谷江津子「肥前京焼風陶器と京焼－新島会館地点出土資料を中心として－」『関西近世考古学研究』Ⅲ　関西近世考古学研究会　1992年

畑中英二「近世の信楽焼」『江戸時代のやきもの－生産と流通』 財団法人瀬戸市文化振興財団　2006年

平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

平方幸雄ほか『平安京左京北辺四坊－第２分冊（公家町）－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

5．まとめ

今回の調査では、18世紀半ばの大規模な土取りの後に町屋が成立したことが判明した。また、土取り後の整地は、宅地利用を前提にして行われたことも明らかとなった。しかし、当時の絵図によれば町屋の成立は18世紀初頭まで遡る。調査地に町名が初出するのは「元禄十四年實測大絵図」（後補書題[1]、1701年成立、図19）で、町内に町屋が確認できるのは「新板増補京絵図　新地入[2]」（1709年成立、図20）以降である。この調査成果と絵図での町屋成立の時期差については２つの可能性が考えられる。１つは18世紀半ばまで調査地が空閑地であった可能性で、もう１つは18世紀半ばに調査地で町屋の建て替えがあった可能性である。調査地周辺の様相が不明な現段階ではそれを明らかにすることはできないが、今回の調査によって当地周辺における江戸時代の土地利用を考えていくうえでの重要な知見を得ることができた。

また、今回の調査では、水溜32から坩堝が、土坑21から鏡の鋳型が出土した。これまで発掘成果からも文献史料からも、江戸時代を通して堀川通以西では鋳鏡師の分布は確認されていない[3]。そのため、現段階でこれら遺物を積極的に評価することは難しいが、当地における手工業生産を明らかにしていくうえでの今後の貴重な資料を得ることができた。

註

１）「元禄十四年實測大絵図」（後補書題）『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』柏書房　1994年

２）「新板増補京絵図　新地入」『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』柏書房　1994年

３）久保智康「付載　近世京都の鋳鏡師」『日本の美術』３　No.394中世・近世の鏡　凸版印刷株式会社　1999年

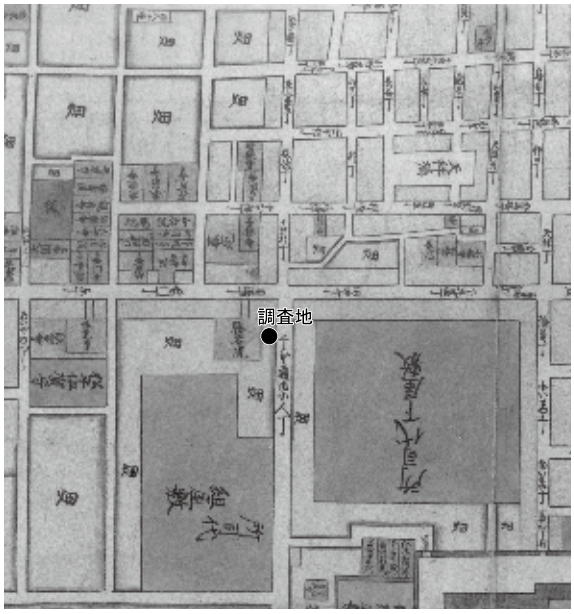


図19 「元禄十四年實測大絵図」（後補書題）部分
元禄十四年（1701）　慶應義塾大学文学部古文書室蔵
『慶長昭和京都地図集成』柏書房より転載、一部加筆した。

図20 「新板増補京絵図　新地入」部分
宝永六年（1709）
『慶長昭和京都地図集成』柏書房より転載、一部加筆した。

付表１　土器観察表

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	胎土	備考
1	緑釉陶器 猿投	香炉	土坑21		(3.5)		体部 20	2.5Y7/2灰黄色 (釉)2.5GY8/1灰白色	φ0.5mm以下の長石・チャートを含む	
2	土師器	皿Sb	整地層 (南壁33層)	8.7	1.8		60	7.5YR7/4にぶい橙色	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む	口縁部に煤付着
3	土師器	皿Sb	整地層	9.0	(2.1)		90	7.5YR7/4にぶい橙色	φ2mm以下の長石・石英・チャート・金雲母を含む	口縁部に煤付着
4	施釉陶器 京焼	丸椀	整地層 (南壁21層)	9.5	5.9	3.3	30	2.5Y8/2灰白色 (釉)2.5Y7/3浅黄色	φ0.5mm以下のチャートを含む	緑・金彩で松竹文
5	施釉陶器 唐津	片口鉢	整地層 (土取り穴)	20.8	(8.0)		口縁部 20	7.5Y5/4にぶい褐色 (釉)2.5Y5/4黄褐色	φ1mm以下の長石を含む	
6	施釉陶器 信楽	壷	整地層	8.6	15.9	9.5	90	2.5Y7/1灰白色 (釉)10YR3/3暗褐色	φ0.5mm以下の長石・チャートを含む	腰白茶壷
7	焼締陶器 信楽	擂鉢	整地層 (土取り穴)		(7.1)			7.5YR7/6橙色	φ3mm以下の長石・石英・チャートを多く含む	
8	焼締陶器 備前	鉢	整地層	14.8	8.4	14	40	2.5YR4/3にぶい赤褐色	φ2mm以下の長石・石英・黒色粒子を含む	
9	磁器 肥前系染付	皿	整地層		(3.7)	13.2	底部 50	N8/0灰白色	φ0.5mm以下の黒色粒子を含む	芙蓉手、獅子文　高台内側に「大明□」
10	土師器	皿N	地下室20 (5～6層)	5.6	(1.4)		60	7.5YR7/4にぶい橙色	φ0.5mm以下の石英・金雲母を含む	
11	土師器	皿Sb	地下室20 (5層上面)	8.1	1.9		60	5YR7/6橙色	φ0.5mm以下の長石・金雲母を含む	
12	土師器	皿Sb	地下室20 (5層上面)	8.4	1.7		95	5YR7/6橙色	φ0.5mm以下の石英・長石・金雲母・赤色粒子を含む	
13	土師器	皿S	地下室20 (5～6層)	9.6	1.9		40	7.5YR7/6橙色	φ0.5mm以下の石英・長石を含む	
14	土師器	皿S	地下室20 (5～6層)	10.0	2.0		40	7.5YR7/6橙色	φ1.0mm以下の石英・赤色粒子を含む	
15	土師器	皿S	地下室20 (5～6層)	10.1	1.8		60	7.5YR6/6橙色	φ2.0mm以下の石英・チャート・赤色粒子を含む	
16	土師器	皿S	地下室20 (5層上面)	9.9	2.0		60	7.5YR6/6橙色	φ2.0mm以下の石英・長石・赤色粒子を含む	
17	土師器	皿S	地下室20 (5層上面)	10.3	2.0		90	10YR7/4にぶい黄橙色	φ0.5mm以下の石英を含む	
18	施釉陶器 唐津	椀	地下室20 (6層)	11.0	4.9	4.1	25	2.5Y6/1黄灰色 (釉)7.5YR4/3褐色		
19	施釉陶器 唐津	椀	地下室20 (5～6層)	15.0	6.6	5.8	40	5YR4/1褐灰色 (釉)2.5Y8/1灰白色、10YR4/2灰黄褐色	φ0.5mm以下の長石を含む	
20	施釉陶器 京焼	平椀	地下室20 (5～6層)	12.7	4.8	4.0	60	2.5Y8/2灰白色 (釉)2.5Y7/3浅黄色		
21	施釉陶器 京焼	丸椀	地下室20 (5～6層)	10.8	6.4	3.8	60	2.5Y8/1灰白色 (釉)2.5Y8/3浅黄色	φ0.5mm以下の長石を含む	
22	磁器 肥前	椀	地下室20 (7～8層)	6.6	4.2	3.2	65	N9/0白色 (釉)うすい明緑灰色		
23	磁器 肥前系染付	椀	地下室20 (5～6層)	7.1	4.6	3.2	60	N9/0白色 (釉)うすい明緑灰色		コンニャク紅葉文
24	磁器 肥前系染付	椀	地下室20 (5層上面)	9.4	5.3	4.0	100	N9/0白色 (釉)うすい明緑灰色		コンニャク+手描きの松竹文
25	輸入陶磁器 漳州	椀	地下室20 (4層)	16.6	6.6	6.4	60	N9/0白色 10Y7/1灰白色	φ0.5mm以下の長石を含む	「赤壁賦」銘文 見込みに「魁」字
26	焼締陶器 信楽	擂鉢	地下室20 (7層)	25.0	10.0	12.0	40	5YR4/2灰褐色	φ3.5mm以下の石英・長石・黒色砂粒を含む	
27	土師器	皿N	水溜23	5.4	1.0		100	7.5YR8/4浅黄橙色	φ0.5mm以下の石英・長石を含む	
28	磁器 肥前系染付	徳利	水溜23	1.5	7.6	3.4	95	N9/0白色 (釉)うすい明青灰色		
29	施釉陶器 京焼	丸椀	水溜23 (掘形)	10.3	7.1	5.6	35	2.5Y7/1灰白色 (釉)10YR4/3にぶい黄褐色、5Y6/3オリーブ黄色		外面の体部下半に飛鉋を施す
30	施釉陶器 京焼	火入れ	水溜23	10.4	8.1	6.4	40	2.5Y7/3浅黄色 (釉)2.5Y5/4黄褐色	φ0.5mm以下の長石・赤色粒子を含む	

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	胎土	備考
31	施釉陶器 京・信楽系	丸椀	水溜23	11.0	6.2	4.6	95	10YR8/2灰白色 (釉)2.5Y4/1黄灰色、 2.5Y7/4浅黄色	φ0.5mm以下の赤色粒子を含む	信楽・石塔窯の製品か
32	土師器	ミニチュア 擂鉢	水溜23	6.1	2.7	2.7	90	7.5YR8/4浅黄橙色	φ0.5mm以下の長石を含む	
33	土師器	塩壷	水溜23	5.8	7.5	5.2	95	7.5YR7/6橙色	φ9.0mm以下の石英・長石・チャート・金雲母を含む	「泉湊伊(織)」銘の刻印
34	施釉陶器 京焼	鍋	水溜23	21.0	(12.5)		50	N5/0灰色 (釉)7.5YR3/3暗褐色	φ0.5mm以下の石英・長石を含む	
35	磁器 肥前系染付	椀	水溜32 (西側断割)	8.1	4.2	3.0	40	N8/0灰白色 (釉)2.5GY7/1明オリーブ灰色		
36	磁器 肥前	椀	水溜32 (西側断割)	9.1	4.1	3.8	60	N8/0灰白色 (釉)2.5GY8/1灰白色		
37	施釉陶器 京焼	丸椀	水溜32 (西側断割)	8.8	5.4	4.3	80	5Y7/1灰白色 (釉)5Y6/2灰オリーブ色	φ0.5mm以下の長石・チャートを含む	コンニャク五弁花+手描きの松竹梅文
38	磁器 肥前系染付	皿	水溜32 (西側断割)	13.3	2.8	8.0	80	N8/0灰白色 (釉)5B7/1明青灰色		
39	土師器	皿S	炉状遺構 28・29	10.3	1.9		40	10YR8/2灰白色	φ1mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む	
40	土師器	皿S	炉状遺構 28・29	10.8	1.9		30	10YR8/2灰白色	φ1mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む	
41	土師器	焜炉	炉状遺構 28・29	22.4	(11.4)		口縁部 20	7.5YR7/4にぶい橙色	φ2mm以下の長石・石英・赤色粒子・金雲母を含む	口縁部上面から体部内面中位にかけて煤付着
42	施釉陶器 肥前	平椀	埋甕18 (1～2層)	12.3	4.5	4.6	30	2.5Y8/2灰白色 (釉)2.5Y8/3淡黄色	φ0.5mm以下の長石・チャートを含む	京焼風 見込みに楼閣山水文
43	焼締陶器 信楽	甕	埋甕18 (4層)		(13.1)	20.7	60	5YR7/6橙色 (表面)10R3/2暗赤褐色	φ1mm以下の長石・チャートを含む	体部内外面に泥漿がかかる
44	土師器	皿N	土坑34	5.0	1.2		100	7.5YR7/4にぶい橙色	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・金雲母を含む	
45	土師器	皿S	土坑34	9.8	1.5		25	7.5YR7/6橙色	φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・金雲母を含む	
46	土師器	皿S	土坑34	10.4	1.8		70	10YR7/3にぶい黄橙色	φ1mm以下の長石・チャートを含む	
47	土師器	皿S	土坑34	11.5	2		25	5YR7/6橙色	φ1mm以下の長石・チャート・金雲母を含む	
48	施釉陶器 京焼	椀	土坑34		(1.7)	3.4	30	2.5Y8/2灰白色 (釉)2.5G8/1灰白色	φ0.5mm以下の長石・チャートを含む	高台内側に「清」印
49	磁器 肥前系染付	椀	土坑34	8.35	4.7	3.4	90	2.5Y8/2灰白色		体部外面に松竹梅文 高台内側に「福」字
50	焼締陶器 堺・明石系	擂鉢	土坑34	27.6	(9.7)		20	2.5YR5/4にぶい赤褐色	φ2.5mm以下の長石・チャートを含む	

※( )は残存数値

付表２　瓦観察表

番号	種類	手法	色調・胎土	出土遺構	時期	備考
瓦1	軒丸瓦 （複弁八葉蓮華文）	一本造技法。瓦当裏面に布目圧痕、上面にヨコ方向のナデか。	N3/0暗灰色 φ4㎜以下の長石・石英・チャートを含む	整地層	平安時代中期	平安宮朝堂院に出土例あり
瓦2	軒丸瓦 （複弁八葉蓮華文）	一本造技法。瓦当裏面に布目圧痕、上面にタテ方向のケズリ。	N4/0灰色 φ4.5㎜以下の長石・チャート・赤色粒子を含む	整地層	平安時代中期	
瓦3	軒丸瓦 （複弁八葉蓮華文）	瓦当下面にヨコ方向のナデ、裏面にナデ。	7.5Y7/4にぶい橙色 φ1.5㎜以下の石英・チャート・赤色粒子を含む	地下室19 （5層）	平安時代中期	栗栖野瓦窯産に類似
瓦4	軒丸瓦 （単弁八葉蓮華文）	瓦当下面にヨコ方向のナデ、裏面にナデ。	2.5Y7/3浅黄色 φ1.5㎜以下の石英・長石・チャート・赤色粒子を含む	整地層	11世紀半ば	栗栖野瓦窯産と同文
瓦5	軒丸瓦 （単弁六葉蓮華文）	包込技法。瓦当下面にヨコ方向のナデ、裏面にナデ。	N6/0灰色 φ3.5㎜以下の石英・長石・チャートを含む	整地層	12世紀	播磨産
瓦6	軒平瓦 （緑釉均整唐草文）	瓦当上面・下面にヨコ方向のケズリ。瓦当下面から平瓦部凸面にかけてタテ方向のケズリ。	10YR6/3にぶい黄橙色 （釉）濃緑色 φ3㎜以下の長石・石英・チャートを含む	整地層	平安時代前期	栗栖野瓦窯HT201型式と同文
瓦7	軒平瓦 （均整唐草文）	瓦当上面にヨコ方向のケズリ、下面にヨコ方向のナデ。平瓦部凹面にナデ、凸面に縄タタキ。	2.5Y5/2暗灰黄色で須恵質 φ3㎜以下の長石・チャートを含む	整地層	平安時代前期	西賀茂角社西群瓦窯NS209型式と同文 平安宮内裏、朝堂院に出土例あり
瓦8	軒平瓦 （均整唐草文）		N4/0灰色 φ1.5㎜以下の長石・チャート・赤色粒子を含む	整地層	平安時代中期	栗栖野瓦窯産・小野瓦窯産と同文
瓦9	軒平瓦 （均整唐草文）	瓦当上面にヨコ方向のナデか、下面にヨコ方向のケズリ。平瓦部凹面に布目、凸面にタテ方向のケズリ。	10YR7/4にぶい黄橙色 φ7.5㎜以下の石英・長石・チャート・赤色粒子を含む	土坑3		平安宮内裏、豊楽院及び民部省出土資料と同文か
瓦10	軒平瓦 （偏行唐草文）	瓦当上面にヨコ方向のケズリ、下面にヨコ方向のナデ。平瓦部凹面に粗い布目、凸面にタテ方向の縄タタキ。	N3/0暗灰色 φ3㎜以下の長石・石英・チャートを含む	整地層	平安時代中期	栗栖野瓦窯産と同文 高陽院に出土例あり
瓦11	軒平瓦 （均整唐草文）	瓦当上面・下面にヨコ方向のケズリ。平瓦部凹面は布目、凸面は太い縄で強く叩く。	N6/0灰色 φ2.0㎜以下のチャートを含む	整地層		讃岐産
瓦12	軒平瓦 （巴文）	瓦当上面にヨコ方向のケズリ、下面・裏面にヨコ方向のナデ。平瓦部凹面にナデ。	N3/0暗灰色 φ2.5㎜以下の石英・長石・チャートを含む	表採	16世紀後半	聚楽第所用瓦か
瓦13	文字瓦 （平瓦）	凸面に縄タタキ、凹面に布目。凹面に「右坊×」の刻印あり。	10Y6/1灰色で須恵質 φ6㎜以下の長石・石英・チャートを含む	整地層	平安時代中期	池田瓦窯出土「右坊城」文字瓦と同印
瓦14	丸瓦	凸面に斜格子文。凹面に布目。玉縁凸面はヨコ方向のナデ。	N4/0灰色 φ3.5㎜以下の石英・長石・チャートを含む	重機掘削時採集	平安時代中期	筑前産 平安宮朝堂院に出土例あり
瓦15	平瓦	凸面に斜格子文、凹面に布目。端部にヨコ方向のケズリ。	N5/0灰色 φ3.5㎜以下の石英・長石・チャート・赤色粒子を含む	整地層	平安時代中期	筑前産
瓦16	平瓦	凸面に花文、凹面に布目。狭端部はヨコ方向のケズリで、凹面側を面取り。	10YR7/4にぶい黄橙色 φ0.5㎜以下の長石・チャートを含む	整地層	平安時代中期	筑前産 平安宮豊楽院、朝堂院、福岡県鞍手郡鞍手町に出土例あり
瓦17	平瓦	凸面に花文、凹面に布目。	7.5YR7/2明褐灰色 φ7㎜以下の長石・チャート・赤色粒子を含む	整地層	平安時代中期	
瓦18	平瓦	凸面上部に花文、下部に斜格子文。凹面に布目。広端部はヨコ方向のケズリで、凹面側を面取り。	10YR7/2にぶい黄橙色 φ3㎜以下の石英・長石・チャート・雲母を含む	整地層	平安時代中期	
瓦19	平瓦	凸面上部に花文、下部に斜格子文。凹面に布目。側端部は施溝分割。広端部はヨコ方向のケズリで、凹面側を面取り。	N4/0灰色 φ1㎜以下の石英・長石・チャート・赤色粒子を含む	整地層	平安時代中期	

付表３　土製品観察表

番号	種類	遺構名	法量	残存	色調・胎土	備考
土1	塼	水溜23	残存長16.0cm、 残存幅14.4cm、 厚さ13.4cm		2.5Y8/1灰白色 φ7mm以下の長石・チャートを含む	西賀茂角社西群瓦窯出土の塼d類に類似
土2	坩堝	水溜32	残存高6.4cm	口縁部	5R6/1赤灰色 φ10mm以下の長石・チャートを含む	内外面にガラス状の物質が付着
土3	鋳型(鏡)	土坑21	湯口径0.9cm、 鋳型径(鏡面部分)20.0cm、 厚さ2.8cm	鏡面部分 20	2.5Y8/1灰白色 φ2mm以下の長石・石英・チャート、 1cm程度の礫、ワラ、モミを含む	平安京左京四条四坊四町出土鋳型の分類では鋳型5類相当

付表４　金属製品観察表

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質
金1	雁首銭	地下室20(7～8層)	1.8	1.9	0.25	2.325	真鍮
金2	煙管(吸口)	地下室20(7～8層)	7.0	0.9	0.85	5.610	真鍮
金3	煙管(雁首)	地下室20(4層)	4.9	1.4	1.9	6.0	真鍮
金4	金槌の頭	地下室20(7～8層)	7.6	2.8	2.7	158.0	鉄
金5	柄鏡	地下室20(5～6層)	(5.1)	1.35	0.2	6.704	真鍮？
金6	火箸	地下室20(4層)	(10.8)	0.3	0.3	4.940	真鍮？
金7	不明	水溜23	(3.3)	(1.4)	0.15	1.762	真鍮？
金8	不明	水溜23	(8.2)	(1.0)	0.2	3.956	真鍮？

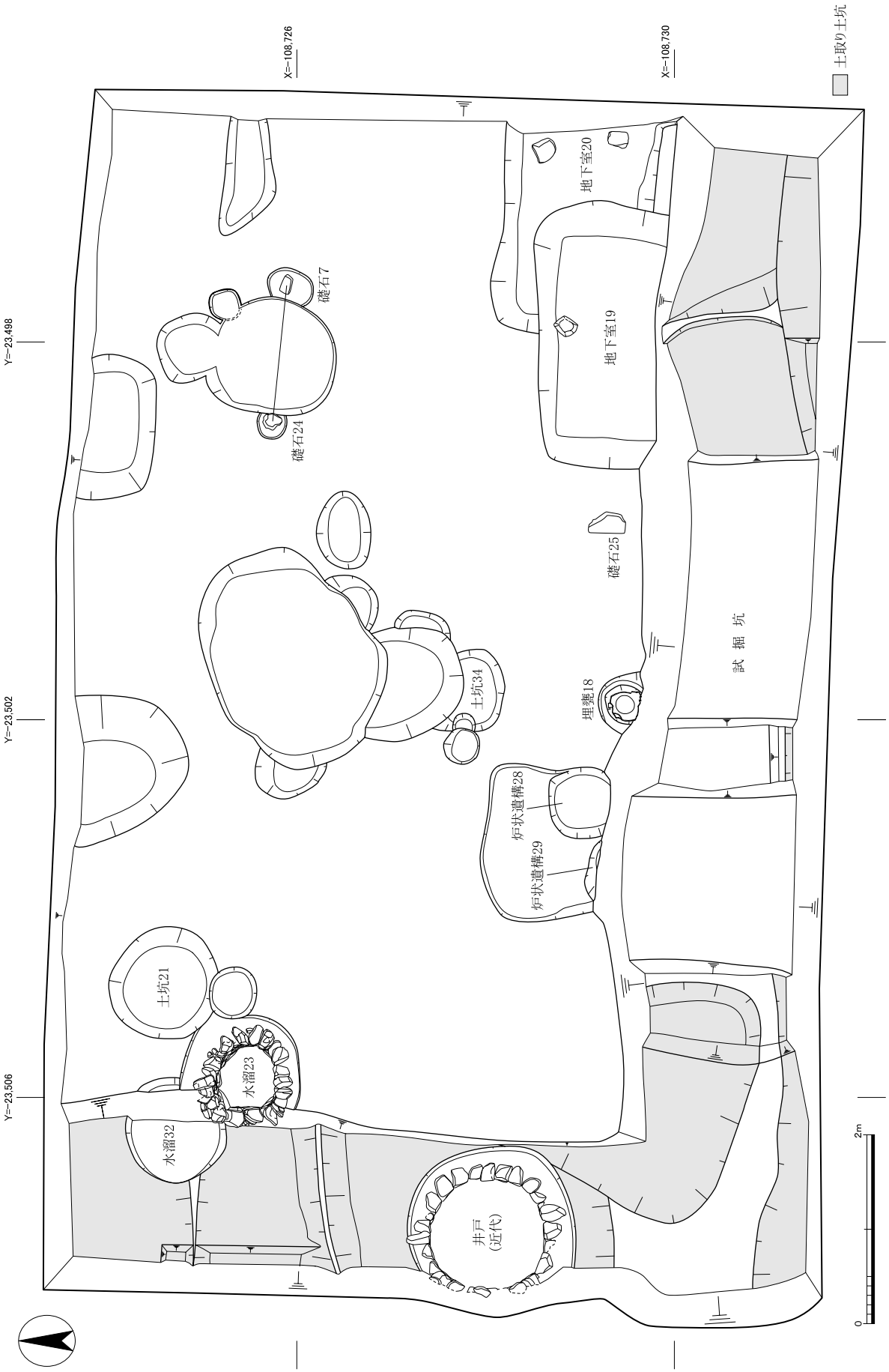
※（ ）は残存数値

付表５　銭貨観察表

番号	種類	遺構名	直径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質
銭1	寛永通寶	地下室20(5層上面)	2.50	0.65	0.16	4.592	銅
銭2	寛永通寶	地下室20(5層上面)	2.40	0.65	0.12	2.641	銅
銭3	寛永通寶	地下室20(5層上面)	2.20	0.70	0.08	1.466	銅
銭4	治平元寶	地下室20(5層上面)	2.30	0.65	0.15	2.790	銅
銭5	嘉祐通寶	地下室20(5～6層)	2.40	0.70	0.11	2.966	銅
銭6	寛永通寶	地下室20(7～8層)	2.40	0.60	0.13	3.734	銅
銭7	熙寧元寶	地下室20(7～8層)	2.35	0.65	0.13	3.224	銅
銭8	□武通□	地下室20(7～8層)	2.40	0.60	0.13	0.965	銅
銭9	寛永通寶	地下室20(5～6層)	2.45	0.60	0.14	3.434	銅
銭10	寛永通寶	地下室20(5～6層)	2.45	0.65	0.13	3.008	銅
銭11	寛永通寶	炉状遺構28・29	2.40	0.70	0.12	2.815	銅
銭12	寛永通寶	地下室19(3層)	2.35	0.60	0.10	2.132	銅

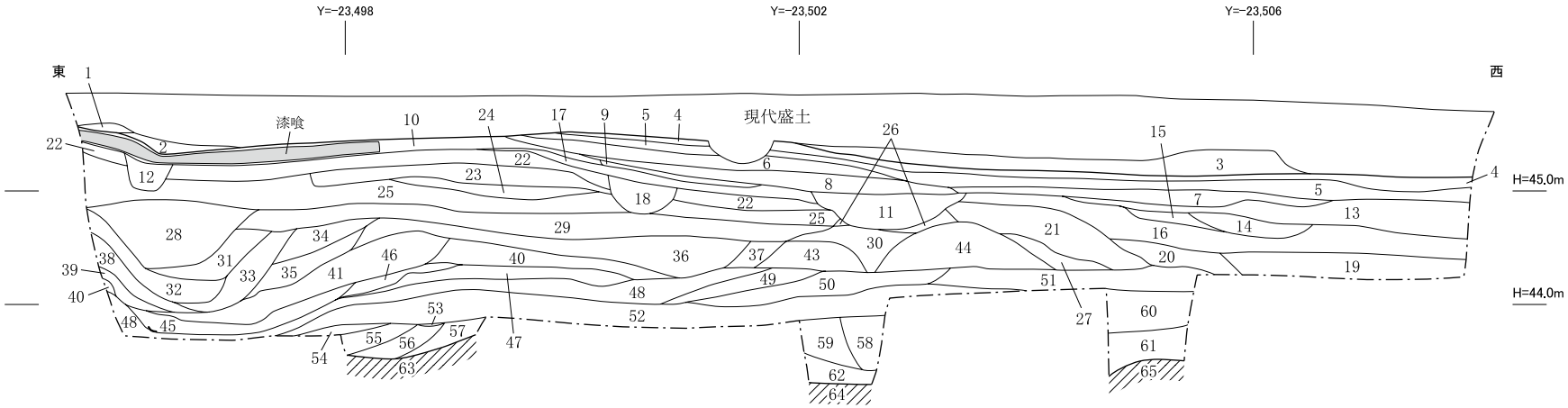
図　　版

図版1　遺構



調査区平面図（1：60）

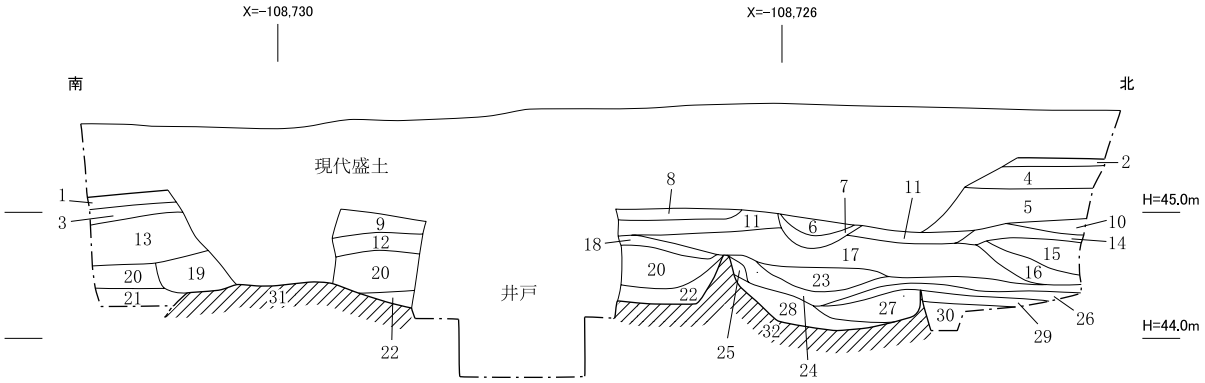
調査区南壁断面図（1：60）



1　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量
2　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土少量
3　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量
4　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ3mm以下の礫少量(タタキ面)
5　10YR3/2黒褐色砂泥　炭多量、φ3cm以下の礫少量
6　10YR4/4褐色砂泥　炭少量、φ10cm以下の礫少量
7　10YR3/2黒褐色砂泥　炭やや多、φ2～10cmの礫多量
(10YR5/6黄褐色のブロック土混)
8　10YR5/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ7cm以下の礫少量
9　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭やや多、φ5cm以下の礫少量
10　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ10cm以下の礫少量(漆喰が入る)
11　10YR3/3暗褐色砂泥　炭やや多、φ3cm以下の礫少量
12　10YR3/3暗褐色砂泥　暗褐色砂泥　炭・焼土少量、
φ3cm以下の礫少量
13　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ10cm以下の礫少量
14　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量
15　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量
16　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
17　10YR3/4暗褐色砂泥　φ5cm以下の礫少量
18　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、凝灰岩片混
19　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、瓦片混
20　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量
21　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ7cm以下の礫少量、
染付・施釉陶器・瓦片混
22　10YR3/3暗褐色砂泥　暗褐色砂泥　φ4cm以下の礫少量
23　10YR4/4褐色砂礫　炭少量、φ9cm以下の礫多量
24　10YR4/4褐色砂泥　炭少量、φ6cm以下の礫やや多
25　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ7cm以下の礫少量
26　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ7cm以下の礫少量
27　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
28　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量
(10YR4/4褐色砂礫のブロック土混)
29　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量
30　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
31　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
32　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ4cm以下の礫少量
33　10YR3/3暗褐色砂泥　炭やや多、φ7cm以下の礫少量
34　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ1cm以下の礫少量
35　7.5YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量、染付・瓦片混
36　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
37　10YR2/3黒褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
38　10YR3/1黒褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量
39　7.5YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
40　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量
41　10YR3/3暗褐色砂泥　炭・焼土少量、φ3cm以下の礫少量
42　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
43　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量
44　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ10cm以下の礫少量
45　10YR3/3暗褐色砂泥(やや粘質)　炭少量、
φ2cm以下の礫少量、磁器・瓦片混
46　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
47　7.5YR4/4褐色砂泥　φ5cm以下の礫少量、瓦片混
48　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、
瓦片・凝灰岩片混
49　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、瓦片混
50　7.5YR3/4暗褐色砂泥　φ4cm以下の礫少量
51　10YR3/4暗褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、瓦片混
52　7.5YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
53　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(粘質)　炭少量
54　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量
55　10YR3/4暗褐色砂泥　φ4cm以下の礫少量
56　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫やや多
57　10YR3/2褐色砂泥(やや粘質)　炭少量、φ1cm程度の礫少量、
瓦片混
58　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量、地山ブロック混
59　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ1～2cmの礫ごく少量、瓦片混
60　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭少量、φ6cm以下の礫少量、瓦片混
61　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ7cm以下の礫少量
62　10YR4/2灰黄褐色砂泥(粗砂混じり)　炭少量、
φ3cm以下の礫少量、瓦片混
63　10YR4/4褐色砂泥
64　10YR5/6黄褐色シルト　　地山
65　10YR5/6黄褐色シルト～砂泥　φ5cm以下の礫少量

0　2m

調査区西壁断面図（1：60）

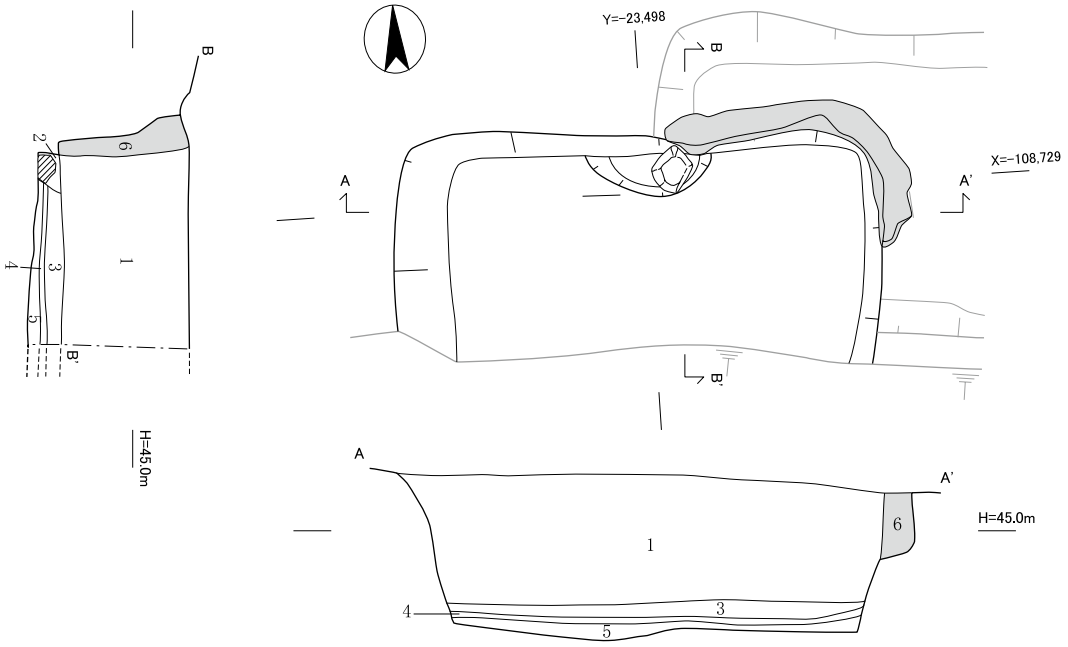


1　10YR4/3黄褐色砂泥　炭少量、φ3mm以下の礫少量
2　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ1～2cmの礫少量
　　タタキ面
3　10YR3/2黒褐色砂泥　炭多量、φ3cm以下の礫少量
4　10YR4/2灰黄褐色砂　炭少量、φ18cm以下の礫少量
5　10YR4/1褐灰色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量、瓦片混
6　10YR4/1褐灰色砂泥　炭少量、φ10cm以下の礫やや多
7　10YR3/1黒褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
8　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
　　(10YR4/2灰黄褐色砂泥のブロック土混)
9　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
　　(10YR4/2灰黄褐色砂泥のブロック土混)
10　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量
　　(10YR4/3にぶい黄褐色砂泥のブロック土混)
11　10YR3/1黒褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、瓦片混
12　10YR3/1黒褐色砂泥　炭少量、φ7cm以下の礫やや多
13　10YR3/3暗褐色砂泥　炭少量、φ10cm以下の礫少量
14　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、瓦片混
　　(10YR4/3にぶい黄褐色砂泥のブロック土混)
15　10YR3/1黒褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量、瓦片混
16　10YR3/1黒褐色砂泥　炭少量、瓦片混
17　10YR3/1黒褐色砂泥　炭少量、φ10cm以下の礫少量、瓦片混
　　(10YR4/3にぶい黄褐色砂泥のブロック土混)
18　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量
19　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ3～12cmの礫多量
20　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
21　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、瓦片混
22　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量、瓦片混
23　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、土師器片混
24　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量、土師器片・瓦片混
25　10YR3/2黒褐色砂泥　φ1cm以下の礫少量
26　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量、φ2cm以下の礫少量
27　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量
28　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭少量
　　(10YR4/1褐灰色砂泥が混)
29　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
30　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　φ5cm以下の礫やや多
　　(10YR3/2黒褐色砂泥が混)
31　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥　φ5cm以下の礫少量
32　10YR4/4褐色砂泥
　　地山

0　2m

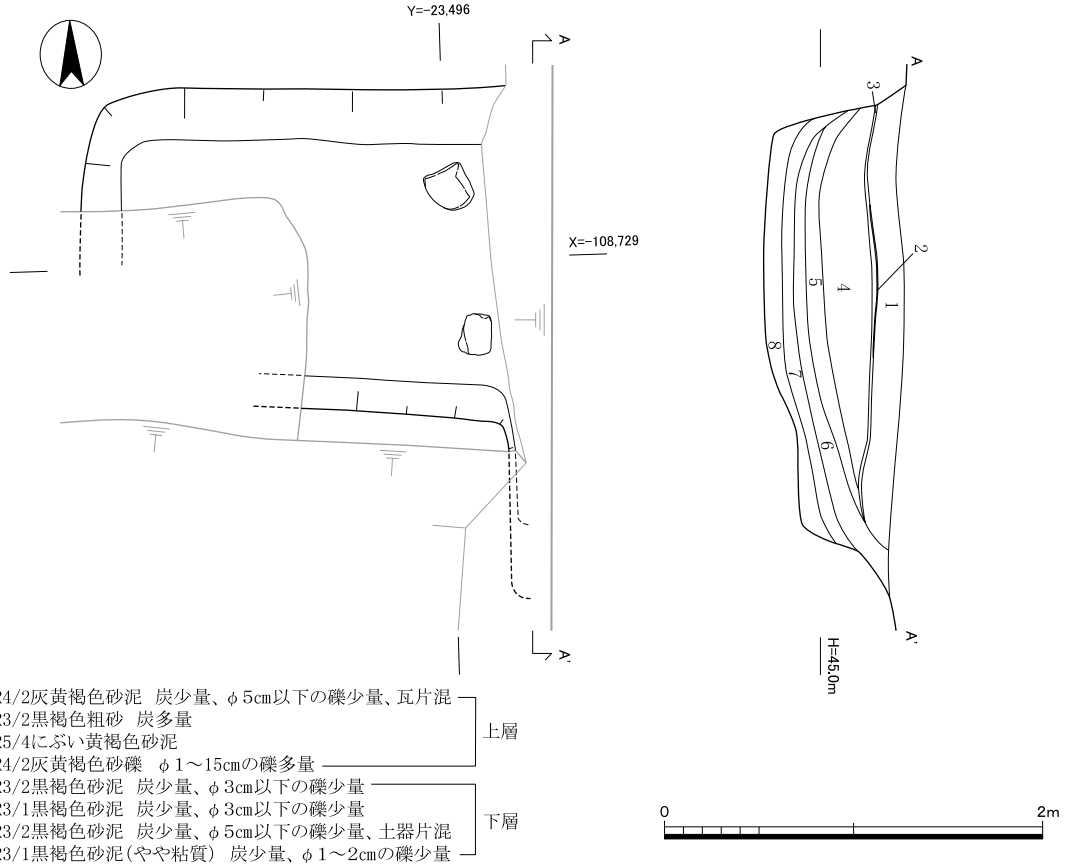
図版3　遺構

地下室19



1　10YR5/4にぶい黄褐色粗砂　φ2～6cmの礫多量
2　10YR4/2灰黄褐色粗砂　φ1cm程度の礫少量
3　10YR4/2灰黄褐色粗砂　φ5cm以下の礫少量
4　10YR3/2黒褐色粗砂　炭多量
5　10YR3/3暗褐色粗砂　炭少量
床面構築土
6　2.5Y5/4黄褐色粘土　壁面補修粘土

地下室20



1　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、瓦片混
2　10YR3/2黒褐色粗砂　炭多量
3　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
4　10YR4/2灰黄褐色砂礫　φ1～15cmの礫多量
上層
5　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
6　10YR3/1黒褐色砂泥　炭少量、φ3cm以下の礫少量
7　10YR3/2黒褐色砂泥　炭少量、φ5cm以下の礫少量、土器片混
8　10YR3/1黒褐色砂泥(やや粘質)　炭少量、φ1～2cmの礫少量
下層

地下室19・20実測図（1：40）

1　調査区全景（西から）

2　礎石７・24（西から）

3　水溜23半裁断面（西から）

1　地下室19（南から）

2　地下室19北断割断面（南西から）

3　地下室20　５層上面銭貨出土状況（北西から）

4　埋甕18（南から）

5　炉状遺構28・29（南西から）

9

6

8

20

19

23

24

26

25

整地層、地下室20出土土器

28

29

31

30

35

38

43

水溜23・32、埋甕18出土土器

瓦2

瓦4

瓦5

瓦6

瓦8

瓦11

瓦10

瓦18

瓦13

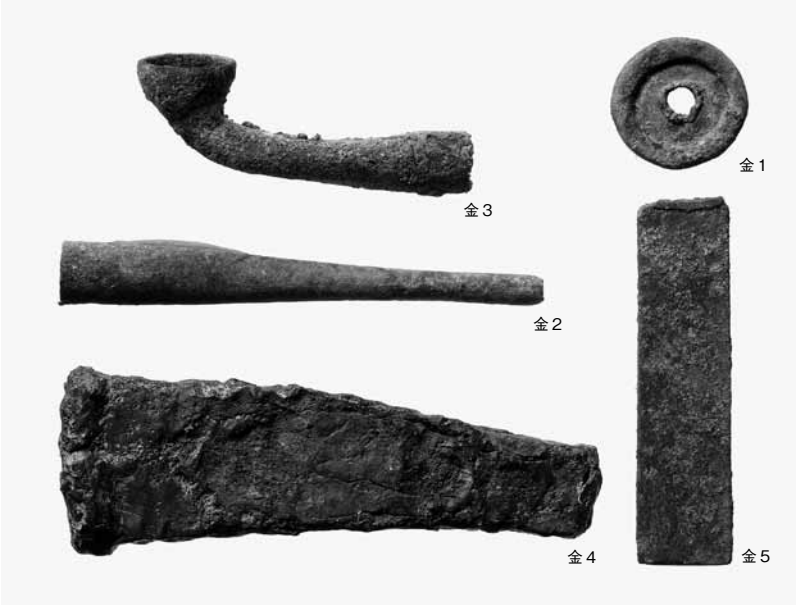
瓦17

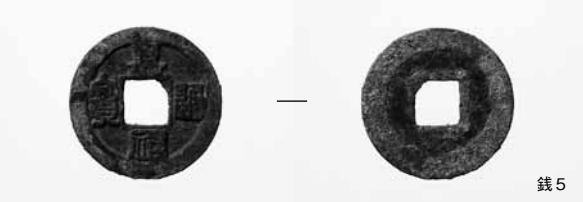
土1

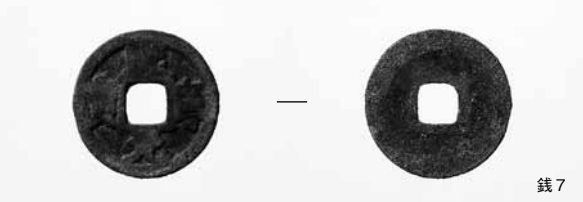
土3

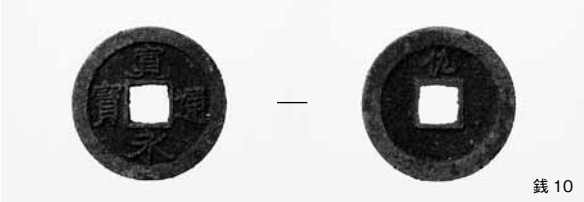
瓦・土製品

図版10　遺物









金属製品・その他の遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいあんきゅうちゅうかいんあと・じゅらくいせき
書名	平安宮中和院跡・聚楽遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２１－３
編著者名	中谷俊哉
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2021年10月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安宮跡（へいあんきゅうあと） 聚楽遺跡（じゅらくいせき）	京都市上京区（きょうとしかみぎょうく） 小山町地先（こやまちょうちさき）	26100	2 237	35度 01分 11秒	135度 44分 33秒	2021年８月２日～2021年８月30日	100㎡	マンション建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安宮跡 聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代		土師器、緑釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦、緑釉瓦、塼、凝灰岩	江戸時代中期の大規模な土取りの後に町屋が成立したことが判明した。
		江戸時代	礎石、地下室、水溜、炉状遺構、埋甕、土取り土坑	土師器、施釉陶器、染付、輸入陶磁器、鋳造関係製品、金属製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-3

平安宮中和院跡・聚楽遺跡

発行日　2021年10月29日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961